159
893
159-Ka893ウ
1200500726999

トルストイの一日一想

加藤一夫譯著

始

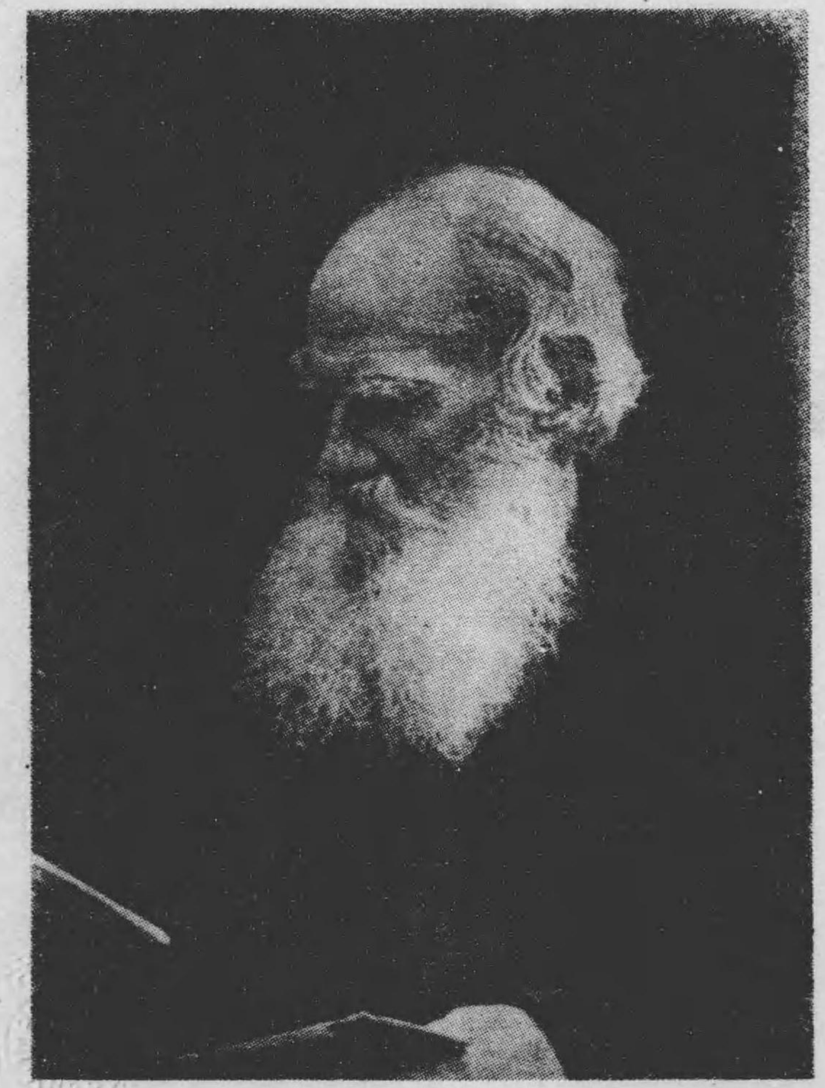
15 9
Ka 893

一月の想

神藤大譯著

國立國會図書館
昭 23.11.13 和

白鯨書房



晩年のトルストイ

國立圖書館
昭和 23.11.13
購入

序

これはずつと前に洛陽堂から出したもので非常によく賣れたものである。だけどその時分の讀者と今の讀者とは人が違ふと思ふから出したのである。

もつとも、その内容は殆ど半分位も違ふ。今それを再び繙いて見たところ、入れたいと思ふところが非常に多く、とりたいと思ふところも多かつたので、新にトルストイの原本を讀み直してかへることにした。だからこれは新しく出すのと同じだと自分は思つて居る。

私はさきに春秋社からトルストイの全集を出させたが、何しろ千頁近い或は以上のものが十四五卷もあるのだから、みな讀んでしまふのは大抵のことでない。

ところがこれは、一日一想として、短い句ではあるが、いゝと思ふところを撰りぬいたものであるから、この一本を精讀し、よく考へるならば、あの大なる全集中の粹を讀むのも同樣である、そのつもりで私はこれを編んだ。

これを出すに當り、直ぐ私の頭の中に浮んで來ることは、この前の世界大戰の後、トルストイの末娘トルスタヤ女史が來朝したとき私をたづね、「日本に行つたなら、加藤と云ふ男が居るが、あれこそトルストイの眞の弟子だから訪ねよ」と或る人から云はれたと私に曰つたことである。ところが私は別にトルストイの弟子だとは思つて居ない、その思想には共鳴するところが多いけれど、トルストイのやうに酒や煙草をやめるまでにはなつて居ない。そこでこれを女史に云ふと「父も決してそんなことを考へては居ない、たゞさうなつてくれゝばいゝと思つた位のことである」と云はれたので大に安心した。

そこで、本書に拔翠したのは私の共鳴した彼の思想であると云ふことをつけ加へておきたいと思ふ。

昭和二十三年九月

編者

一日一想目次

一月一日　何故に……一七
二日　死と人生……一七
三日　死と奮闘……一九
四日　死……一九
五日　これは何だ……二〇
六日　避くべからざる死……二一
七日　だが、それは何だ……二二
八日　兒戯に過ぎない人生……二三
九日　神の概念と神……二四
十日　神……二五
十一日　本然の道……二六
十二日　人生の眞の幸福……二六
十三日　誤れる幸福觀……二九
一月十四日　僞科學……二九
十五日　生命を知らざる科學……三〇
十六日　誤れる說教……三一
十七日　生活しない人……三二
十八日　普遍我……三三
十九日　開眼一歩……三三
二十日　あらはなる生命……三四
二十一日　生の分裂……三四
二十二日　より高き生……三五
二十三日　必然な眞生命の出生……三六
二十四日　理性と動物性……三七
二十五日　新生活への突入……三八
二十六日　物質と生命……三九

一月二十七日　意識の法則……三九
二十八日　動物我より理性我へ……四〇
二十九日　動物我の運命……四一
三十日　自我の材料……四一
三十一日　新生とは……四二
二月一日　個人的存在は？……四四
二日　眞の幸福……四四
三日　調和に向ひつゝある人生……四五
四日　信仰……四六
五日　個人性と眞生命……四六
六日　愛と理性……四七
七日　斷乎として拒め……四八
八日　眞の生活……四九
九日　愛……五〇
十日　肉體的活動と精神的活動との一致……五〇
二月十一日　愛と自己否定……五一
十二日　愛と生命……五一
十三日　愛と自我の犠牲……五二
十四日　愛と理性の太陽……五三
十五日　死は存在せず……五四
十六日　眞の自我……五四
十七日　物質と意識……五五
十八日　意識の流動性……五六
十九日　意識と死……五七
二十日　根本意識……五八
二十一日　撰擇と勇氣……五九
二十二日　自然……五九
二十三日　誰の番だ……六〇
二十四日　愛兒の死……六一

二月二十五日　脈の死……六一
二十六日　木の死……六三
二十七日　生きんとする意思……六三
二十八日　何の聲ぞ……六四
二十九日　何時始まつたか……六五
三月一日　理想……六七
二日　意思の訓練？……六八
三日　性慾……六八
四日　淫逸……六九
五日　貞潔……七〇
六日　結婚……七〇
七日　性慾の考へ方……七一
八日　夢……七二
九日　情慾に勝つには……七三
十日　價値ある貞潔……七四
三月十一日　結婚と性慾……七四
十二日　結婚・戀・成算……七五
十三日　男と女……七五
十四日　放蕩……七六
十五日　肉的愛情……七六
十六日　肉體的愛情の否定……七七
十七日　理想とは？……七七
十八日　子の出生を恐れる性交は？……七八
十九日　遊廓……七九
二十日　眞の貞操……七九
二十一日　金をつくりたいと云ふ心……八〇
二十二日　結婚前の性交……八一
二十三日　地には平和人には惠み……八二
二十四日　家庭……八三
二十五日　無抵抗……八四

三月二十六日　基督教の眞髓……八四
二十七日　神祕の鍵……八四
二十八日　裁　判……八五
二十九日　審きと救……八六
三十日　永生とは！……八六
三十一日　今日の社會と教會的基督教……八七
四月一日　組織的暴力……八八
二日　都會と田舍……八八
三日　善と惡……九〇
四日　絶對の貞操……九〇
五日　現代生活と耶蘇の教理……九一
六日　耶蘇の第一誡……九一
七日　困難と實行……九二
八日　可能と不可能……九三
九日　悔　改……九三
四月十日　死と永遠……九四
十一日　哀れなる不滅なるものを……九四
十二日　愚なる哉……九五
十三日　個人的慾求は死である……九六
十四日　眞生命と神……九七
十五日　眞の生活……九七
十六日　一條の綱……九八
十七日　信仰の動力……九八
十八日　信仰と判別……九九
十九日　信仰には報賞はない……九九
二十日　幻　影……九九
二十一日　誤れる人生觀……一〇〇
二十二日　教會の眞理僭取……一〇一
二十三日　無抵抗の教……一〇一
二十四日　不信者の云ひ分……一〇二

四月二十五日　世の教理……一〇三
二十六日　聖地に入らなかつたけれど善をなした巡禮……一〇四
二十七日　革命の危險と基督教……一〇四
二十八日　暴力と幸福……一〇五
二十九日　基督教徒となる資格……一〇六
三十日　勞　役……一〇六
五月一日　近づく革命……一〇八
二日　何れか……一〇八
三日　世に降れる教會……一〇九
四日　世界平和の唯一の道……一一〇
五日　革命の性質の相違と參加者の態度……一一〇
六日　依然として舊い形式の革命……一一一
七日　鷹と鶏……一一一
五月八日　不合理なる生活……一一二
九日　學ぶべき平和な生活……一一三
十日　融　會……一一四
十一日　自然の愛……一一五
十二日　自惚の強い雄雛……一一六
十三日　栗鼠と狼……一一七
十四日　資本主義と社會主義……一一八
十五日　よく生きたい……一一九
十六日　他　愛……一二〇
十七日　書　物……一二一
十八日　惡に敵する勿れ……一二二
十九日　自然と一つ……一二三
二十日　惡に敵する勿れ……一二四
二十一日　過ぎゆく青春よ……一二五
二十二日　和　解……一二六

五月二十三日　無抵抗の實行……一二七
二十四日　非　難……一二八
二十五日　自然その者……一二九
二十六日　體　罰……一二九
二十七日　感　化……一三一
二十八日　喧　嘩……一三一
二十九日　善い隣……一三二
三十日　現代文明の特徴……一三三
三十一日　理想鄉……一三四
六月一日　女の人生觀……一三六
二日　救濟の困難……一三六
三日　都會貧民……一三七
四日　父の愛と神の愛……一三七
五日　そんなものではない……一三八
六日　親密になれないのは……一三八
六月七日　世人の宗教觀……一三九
八日　私の富……一四〇
九日　施與と慇懃……一四〇
十日　恥……一四一
十一日　魔法の金……一四一
十二日　美と愛……一四二
十三日　魔法の金の所有者……一四三
十四日　先づ奪はざれ……一四三
十五日　金の暴力……一四四
十六日　奴隷制……一四四
十七日　武裝者の暴力……一四五
十八日　眞の奴隷制……一四五
十九日　金と奴隷制……一四六
二十日　わが軛は輕し……一四七
二十一日　神と共に在り……一四七

六月二十二日　百姓と彼の馬……一四八
二十三日　耶蘇の復活……一四九
二十四日　新しい奴隷……一五〇
二十五日　慈善の本性……一五〇
二十六日　簡單なる結論……一五一
二十七日　愧ぢよ……一五一
二十八日　雇人と主人……一五二
二十九日　生産と勞力……一五二
三十日　有用の徵證……一五三
七月一日　起源なる神……一五四
二日　新宗教……一五四
三日　自然と人……一五五
四日　遲起き……一五六
五日　青春……一五七
六日　田園生活……一五九
七月七日　基督の命令……一五九
八日　小供の純愛……一六〇
九日　他人の批評……一六一
十日　誠實……一六二
十一日　純潔と死……一六二
十二日　猫の惡計……一六三
十三日　床下の鼠……一六五
十四日　道を求めて……一六五
十五日　本質表象……一六六
十六日　自然と人間……一六七
十七日　狼と弓……一六七
十八日　實例……一六九
十九日　神醉……一六九
二十日　汎勞働……一七〇
二十一日　疑惑の日……一七一

七月二十二日　無政府と制度……一七二
二十三日　金錢と奴隷……一七二
二十四日　眞の財産……一七三
二十五日　惡の根源……一七三
二十六日　不思議な事……一七四
二十七日　女子の權利とは……一七四
二十八日　二人の百姓……一七五
二十九日　女の奉仕……一七六
三十日　子を產まない女……一七七
三十一日　賢婦……一七八
八月一日　二頭の馬……一七九
二日　嘲笑を忍ぶ德……一八〇
三日　犬と料理人と……一八一
四日　斧と鋸と……一八二
五日　調和せる自然……一八三
六日　召使……一八四
七日　八月七日の日記より……一八四
八日　基督の教理と暴力……一八五
九日　社會救濟としての耶蘇の教　一八五
十日　一歩前進……一八六
十一日　二つの道……一八七
十二日　惡に敵する勿れと
十字架による宣布……一八八
十三日　隱れたるより顯
はる〜はなし……一八九
十四日　祈の時……一九〇
十五日　愛の喜び……一九一
十六日　貧者の知足……一九二
十七日　神を知る……一九三
十八日　眞の敎と人間性……一九四

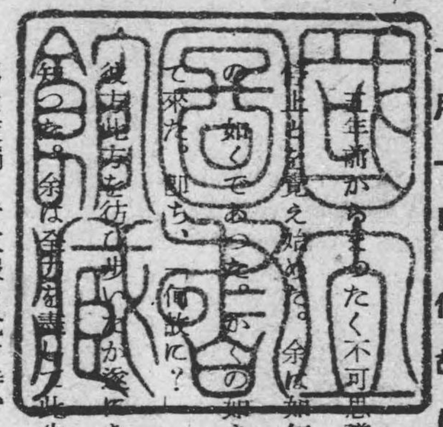
八月十九日　秀才と彼自身……一九五
二十日　悔改……一九五
二十一日　自然の美と人界の醜……一九六
二十二日　自然のまゝに……一九七
二十三日　別の主人……一九八
二十四日　御心をなさせ給へ……一九九
二十五日　知識と生命……二〇〇
二十六日　火は火を消し得ぬ如く
惡は惡を鎭壓し得ぬ……二〇一
二十七日　感謝……二〇一
二十八日　誤れる先入見による解譯……二〇二
二十九日　死は終つた……二〇三
三十日　死刑……二〇六
三十一日　乞食を捕へるのは……二〇七
九月一日　蛇の頭と尾……二〇八
九月二日　遺產の分配……二〇九
三日　猿……二一〇
四日　猿と豌豆……二一一
五日　立派な糸……二一一
六日　乳牛……二一二
七日　家鴨と月……二一三
八日　穀倉の下の鼠……二一四
九日　蒼鷺と魚と蟹……二一五
十日　水の精と眞珠……二一七
十一日　盲人と牛乳……二一八
十二日　狼と獵人……二一〇
十三日　勞働逃避の權利……二一〇
十四日　富者と貧者……二一二
十五日　此所と彼所……二一二
十六日　棄兒……二一三

九月十七日　精　進……二三五
十八日　願望と存在……二三六
十九日　何を信ずるか……二三六
二十日　刑　罰……二三六
二十一日　刑か救か……二三七
二十二日　覺めた時……二三八
二十三日　土地私有……二三九
二十四日　虐殺の上に
　　築かれたる職業……二三九
二十五日　生みの苦しみ……二四〇
二十六日　試　練……二四一
二十七日　掠奪の上に築かれたる生活　二四一
二十八日　知識階級の勞働遁逃……二四二
二十九日　無害有用なる活動及制度……二四三
三十日　政治家の心事……二四三
十月一日　政治的活動……二四五
二日　愛……二四五
三日　研究と原理……二四六
四日　科學と道德……二四六
五日　進化論……二四七
六日　分　業……二四七
七日　奉仕のための科學と藝術……二四八
八日　國家の施與？……二四九
九日　利用と寄與……二四九
十日　唯美的な快樂と善……二五〇
十一日　他への嘘と自らへの嘘……二五〇
十二日　勞働生活と發明品……二五一
十三日　實際的科學……二五一
十四日　科學の任務……二五二
十五日　吾等の藝術……二五三

十月十六日　外　科　醫……二五三
十七日　民衆の科學及藝術……二五四
十八日　忘れた善は神と
　　共在したから……二五五
十九日　人間の流動性……二五五
二十日　今日の科學及び藝術……二五六
二十一日　神の器としての人……二五七
二十二日　貧者と藝術……二五七
二十三日　科學の有用となる迄……二五八
二十四日　個人欲と社會正義……二五九
二十五日　眞の藝術の消滅……二五九
二十六日　無用なる科學及藝術……二六〇
二十七日　眞の科學及藝術……二六〇
二十八日　生　命……二六一
二十九日　必要な只一事……二六三
十月三十日　生活の主要條件……二六三
三十一日　微さき一人になすは
　　我になすなり……二六四
十一月一日　酒……二六六
二日　田園勞働と工場……二六七
三日　眞　愛……二六七
四日　正　直……二六八
五日　人物と言葉……二六〇
六日　人の　子……二六〇
七日　根なき花……二六一
八日　單純な表情……二六二
九日　戰　爭……二六三
十日　結　婚……二六四
十一日　男の自由を奪……二六五
十二日　女……二六六

十一月十三日　藝術と勞力……二六七
十四日　賢者の言を誤解して……二六八
十五日　藝術家の自省……二六九
十六日　美と善……二七〇
十七日　趣味と藝術……二七〇
十八日　藝術と人生……二七一
十九日　言葉と文藝……二七二
二十日　藝術の感染力……二七二
二十一日　物と死……二七三
二十二日　藝術と藝術活動……二七四
二十三日　藝術と人生……二七四
二十四日　藝術の力……二七五
二十五日　宗教と藝術……二七六
二十六日　宗教とは何ぞ……二七六
二十七日　中世の藝術……二七七
十二月十三日、宗教、道德……二八九
十四日　靈交の喜び……二九〇
十五日　眞の基督者……二九〇
十六日　神の國致來……二九一
十七日　誤解されたる基督教……二九一
十八日　不思議……二九二
十九日　基督教と奇蹟……二九二
二十日　基督教と教會……二九三
二十一日　暴力は暴力を破り得ず……二九四
二十二日　順序……二九五
二十三日　自ら改めよ……二九六
二十四日　自制……二九七
二十五日　何を爲すべき乎……二九八
二十六日　最始の義務……二九九
二十七日　他人の破壞は不能……二九九
一月二十八日　藝術を味ひ得る者……二七八
二十九日　生活……二七八
三十日　現代の藝術……二七九
十二月一日　新しい感情と藝術……二八一
二日　宗教的感情……二八一
三日　七頃の狹少……二八二
四日　普遍藝術と特殊藝術……二八三
五日　藝術の普遍性……二八四
六日　僞藝術創作の順序……二八四
七日　技巧……二八六
八日　批評家……二八六
九日　說明と表現……二八七
十日　內驗と外顯……二八八
十一日　社會的方向……二八八
十二日　本當にわるい事……二八九
十二月二十八日　田園への歸還……三〇〇
二十九日　杞憂……三〇一
三十日　生活の四分野……三〇二
三十一日　理想の社會……三〇五

一月一日　何故に



一年前からまったく不可思議なことが余の内に起つた。余は最初心的空虚と生活の目的とが見え始めた。余は如何にして生くべきか、又、何を爲すべき乎を知らざるもの如くであつた。かくの如き生活の中止は何時も同じやうな問題となつて表はれて來た。即ち、「何故に？」「今は？」、此後は？」等である。余は其日暮しをして、彼女達を彷徨せしめ、わが愛にある懸崖に近づいた。余は明に前途唯破壊あるのみだと知つた。余は全力を盡して此生活から逃れん事を力めた。と、急に余は此の仕合せな男は夜獨りで衣服を脱ぐ時、わが室の戸棚で縊死をしない樣に繩を隱し、又銃をもつて獵に出かける事を止めた。斯くして、余は此の容易な方法に依つて生活から遁れんとする誘惑を避けやうとした。

一月二日　死と人生

巴里滞在中に見た死刑執行の光景は、余に進歩の迷信の弱點を啓示した。胴から頭

が分れるのを見た時、そしてそれが別々に箱の中に落ちた音を聞いた時、余はたゞに余の理性によつてのみでなく、余の全存在をもつて、近代文明の合理的學說も、その制度も、この行爲を是認することの出來ない事を了解した。開闢の初めからの一切のこの世の人民が、どんな學說によつてその必要を認めても、その不必要であることをその害惡であることを、余は了解した。また、善惡の標準は、人民が言つたり爲たりすることでもなく、また進步でもない。たゞ余自身及び余自身の心情であると云ふことを了解した。進步をもつて人生の規定とする、この迷信の不充分であると云ふ他の例は、余の兄の死であつた。彼はまだ若い時に病氣になつた。彼はまる一年間惱んだそして非常に苦しで死んだ。彼は才分の豐かな、親切心のある、眞面目な性質の男であつた。併しながら彼は、何の爲に生きたか、そして彼の死は何を意味するかを知らないで、この世を去つた。如何なる學說も、この問題に就いて、彼の長い苦しみの間中余にも彼にも、何等の答をも得なかつた。……」

一月三日　死と奮鬪

彼が死よりも惡いものはないと云つたのは全く道理である。死が萬事の終りであると云ふことを考へると、その場合、生は何者よりも惡るい樣に見える。もしニコラス・トルストイ（兄）なるものから何者も殘らないとするならば、奮鬪や苦鬪は何になるか。彼は死の接近を感じたとは云はなかつた。併し私は彼が刻々にそれを體て居りそして彼が後に殘さるゝものゝ何であるかを知つて居る。終焉の數分前彼は睡ろんだ。そして突如として覺め、恐怖のうちに叫んだ。「此れは何だ」と、彼は死を見たのだ、そして、若し彼が摑まるべき何者をも見出さなかつたとするならば、何を僕が見出さう。更に少ないのだ。慥に私も他の何人も、彼の如く最後の瞬間まで鬪はないだらう……

一月四日　死

彼の終焉を見たものは凡て云ふ「何と云ふ靜かな平和な臨終だつたらう」と。併し

ながら、彼の感じのたゞ一つも私には隠され得ないから、私にはよくわかつて居る。それは彼にとつて如何に恐るべき苦痛であつたらう。幾百回となく僕は自分に云つた、「死にたる者は死にたる者に葬らせよ」と。けれど何等かの方法に於いて、人はその残餘の力を費さねばならぬ。引力のある限り、君は石に命じて飛び上れとは云へない。君は陳腐な戯談に笑ふことは出來ない。君は空腹でない時に食べる事は出來ない。明日にもその厭ふべき虚偽と自己欺瞞とをもつて、死の苦悶が始まるかも知れない時に、一切が虚無に歸して、私にとつて何者でもなくなつた時に、何をくよ〳〵するか。不思議なことだ。「有用であれ、有徳であれ、生ある限り幸福であれ」と人々は他人に云ふ。併し有用も道徳も幸福も、眞理をもて統一される。そして私の三十二年の生活の後に見出した眞理は、吾々の存在の條件の懼るべき者だと云ふことである。

一月五日　これは何だ

彼等は云ふ、「有りの儘に生きよ、君はその條件のもとに生れて來たのだ」と。よ

し私は自分の見出したとほりの生を送る。併し人間はその極に達するとき、一切は無意義であり、欺瞞であり、そして何者よりも愛すべき眞理は怖ろしい者だと云ふことを認める。これを十分に、そして明確に見た時には、人は跳び上つて、そして私の兄の様に叫ぶのだ。「此れは何だ……」と。

一月六日　避くべからざる死

東洋のお伽噺に、ある一人の旅人が、その途中、ある猛獸に襲はれた話がある。自分の身を救はんが爲に、旅人は水の枯れた井戸の中に遁れ込んだ。併し彼はその底に彼を呑まうとして居る龍が大きな口をあけて待つて居るのを見た。不幸な男は野獸が恐いので外に出る事が出來なかつた。そこで彼は井戸の裂目から生えて居る野生木の枝を摑んだ。彼の腕は疲れて來た。そして彼は自分は最早死なねばならない事を感じた。死はその何れの側でも待つて居た。而して彼は尙握りつゞけた。やがてまた彼は一つは黑く一つは白い二つの二十日鼠がその野生木の幹を嚙つて居るのを見た。鼠た

ちは段々とその幹の周圍を嚙み碎いて行つた。木は今にも嚙り終へられ折られねばならぬ。そして彼は龍の口に呑まれねばならぬ。旅人はこれを見た。そして滅びねばならぬのを知つた。併し尙その枝にかゝつて居ながら、彼は周圍を見まはした。そしてその野生木の木の葉に數滴の蜜の滴つて居るのを見て、舌を出してそれを舐めた。

〃余も亦、死の龍が不可避的に余を待つて居て、余を寸々に嚙み裂かうとして居るのを見ながら、生命の枝につかまつた。そして余は何故にかゝる苦しみが余の運命の上に落ちて來たかを解することが出來なかつた。余はまた、かつて余を慰さめた蜜を吸はうとした。けれどそれは余の味覺を苦つた。そしてその間始終、白と黑との鼠が木の幹を嚙つて居た。余はあまり明白に龍を見た。そして蜜はもう甘くなかつた。余は龍から脫れ得ないのを見た。そして余の眼を二つの鼠から離す事が出來なかつた。これはお伽噺でない。これは萬人に了解さるべき生ける回避すべからざる眞理である。

一月七日　だがそれは何だ

余自身の行動の理由を知るまでは、余は何事をもなし得ない。生きて行く事も出來ない。この頃の余の時間の多くはそれに捧げられて居た。家事や領地の細々した處分に就いて考へて居る間に、次の樣な疑問が余の心頭に浮んだ。「左樣私は今サマラに六千デサテインをもつて居る。そして三百頭の馬――だがそれが何だ……」と。或時はまた如何にして我子を敎育しやうかと考へながら自分に問うた。「何故？」と。また或る時は、どんな方法で最もよく人民の幸福が擴張されるかを考へながら、余は突如として叫んだ「だが一體それと何の關はりがあるんだ」と。余の作品が余に與へた名聲に就いて考へる時、余は常に自ら云ふを常とした。「よしたとひ俺がゴオゴルやブウシキンやシエキスピイヤやモルよりも――世界の凡ゆる作家よりも――名高くなつたとしても、それが何だ」と。余は何等の答をも見出し得なかつた。

一月八日　兒戲に過ぎない人生

余はかくの如き有樣にて二年を過した。そして遂に長い間余の中にあつて準備して

居た、そして其兆候が朧に感じられて居た、一つの變化が起つた「余自身の卽ち富者學者の階級の生活が、單に厭ふべきものとなつたばかりでなく、一切の意義を失つてしまつた。凡て吾々の行動や推理や科學や藝術は、全く新しい光に輝らされて余に表れた。余はそれが凡て兒戯に過ぎなかつたのを了解した。その中に意義を求めたつて何にもならないのを了解した。

一月九日　神の概念と神

余は早春のある日、神の囁きを聽きながら、この二年間不斷に考へて居た同じたゞ一つの事を想つて居た——余は亦神を覓めて居たのである——事を覺て居る。余は自分に曰つた。「よし神はないのだ。自分の想像を離れては何もないんだ。自分の生命ほど實在的なものは何もないんだ——そんな者は何もありやしない、何も、どんな奇蹟だつて在ると云ふことを證明し得ないんだ。何故なら、奇蹟はたゞ自分の不合理な想像の中にあるばかりだから。

そして然る時、余は自らに問うた。「併し余の覓めて居る神の概念は一體何處から來たのだ」と。そしてまた生命は喜ばしげに、余の血管に閃めきわたつた。余の周圍のものは復活した樣に見えた、新らしい意義をとつた樣に見えた。余の歡びは併し長くは繼かなかつた。何故なれば、推理がその働らきをつゞけたから。「神の概念は神でない。概念は余自身のうちに行はれるものである。神の概念は自分の撰ぶところに任かせて、自分の衷に起すことも出來れば起さないことも出來る。それは余の覓むるものでない。余の覓むるものは、それなしには生きられない樣な者である。「再びまた凡てのものは余の周圍に、また余の中に、亡んでしまつた。再びまた余は自殺を思つた」

一月十日　神

「この衷心や復興は一體何であつたか。神の存在の信仰を失つた時には生きて居なかつた。もし神を見出し得ると云ふ感情が少しも余の衷になかつたなら、余は最早、ず

つと前に自殺して居たであらう。余は實際たゞ彼を感じ彼を求めた時にのみ生きて居たのである。「ぢやそれ以上何を求める必要があるんだ」ある聲が余のうちで叫んで居る樣に見えた。「これが彼だ。自分にとつてそれを離れては生命のない彼だ。神を知ることと、生きることは一つだ。神は生命だ」

一月十一日　本然の道

「鳥は飛んだり歩いたり啄ばんだり考へたりしなければならぬ樣に創られて居る。そして凡てこれをなした時、始めてそれは滿足し幸福である。然る時始めて鳥である。人間も亦全くそのとほりである。彼が歩るいたり、重いものをころがしたり、揚げたり、運んだり、指や眼や耳や舌や腦をもつて働いたりする時にのみ、始めて彼は滿足する。その時に於いてのみ彼は人である。」

一月十二日　人生の眞の幸福

太古以來、樣々な種族の間に於いて、人類の大教師達はいろ〳〵明かに人生の定義

を示して、その內面的矛盾を解決し、人類に正當な眞幸福と眞人生とを指し示して居る。

そして凡ての人の世界に於ける地位が同一であり、また個人的幸福を追ひ求める努力と彼の無力の意識との矛盾が凡ての人々に同一であるが爲に、人生の眞幸福に就いてのあらゆる定義と、人道上の大偉人達の人類に示す眞啓示とは常に一致して居る。

「人生とは人類の幸福の爲に天が下した遍照の光である。」基督以前六百年の頃に、孔子はすでに恁う云つて居る。

「人生はより大なる幸福へ幸福へと達せんとする靈魂の巡禮であり完成である。」同時代の婆羅門はさう云つた。

「人生は幸福なる涅槃に到達せんが爲めの自我脫却である」と孔子と同時代の釋迦が云つた。

「人生は最高な幸福に達せんが爲めの平和と忍從との道である。」これも孔子と同時代の老子の云つた所である。

「生命とは彼が彼の律法を完くすることに依つて幸福を受けんが爲めに、人の鼻に吹き込んだ神の氣息である」とヘブライの聖人モーゼが云つた。

「人生とは人に幸福を與へる理性に從ふことである」とストツイク派の人々は云つた。

「人生は人に幸福を與へる神と隣人とに對する愛である」キリストは前人の云つたことを凡て自らの定義の中に集めて恁う云つた。

吾々はこれ等の人生の定義に同意しないことが出來る。またこれらの定義をもつと適切に、もつと明かに表現することも出來る。けれどもこれらの定義が、人生の矛盾を取り去つて、吾々の到達し得ない個人的幸福に對する憧憬の代りに、苦痛に依つても死によつても破壞されないも一つの幸福に對する憧憬を指示して、人生に合理的意義を與へたと云ふことは、否定し得ない事實である。更に、これ等の定義は、理論的に正しいと共に、此定義を受け入れた億兆の人によつて、實驗上の保證を得たものであることも、亦否まれ得ない事實である……

一月十三日　誤れる幸福觀

外的觀察法に依つて提供せられた人生の目的は、個性の存續、外形の存續、近似者の出產、生存の爲めの爭鬪である。そしてかくの如き空想的な生の目的が、人々を捕へるのである。

人生の根本的矛盾を度外視して居る此の誤まられたる科學の人生觀は、更に極端その推論を進めて、個人生活のみの幸福の可能をゆるし、動物的存在のみの幸福を道としてゆるして衆愚の喜びを買ふに至つた。

一月十四日　僞科學

物理學は力の法則と關係とを語るけれども、力とは何ぞやとの問題にぶつつかつたり、力の性質を說明しようとはしない。化學は物質の關係を語るけれども、物質の何であるかを尋ねたりその性質の定義を求めたりはしない。生物學は生命の形態を取り

振つて居るけれども生命は何ぞやの問題にぶつつかつたり、その性質の定義を求めたり嘗しない。眞の科學は、力や物質や生命をその研究の對象とはしないで、他の學問の範圍から得て來たものを、公理とし、特殊科學を組成する働きの根柢として、それ等を受け入れ居る。科學は斯う云ふ風にその主體を考へて居る。此科學ならば、民衆に有害な感化を與へて、彼等を無智に導くやうなことはない。しかし誤まられたる哲學的な科學は、その主體をこんな風に考へて居ない。「吾々は物質と生命と力とを研究する。そして研究すればそれが解るであらう」と彼等は云ふ。けれども彼等は、その研究して居ることが、物質、力、生命のそれではなくて、單にその關係と形態とに過ぎないと云ふことを知らないのである。

一月十五日　生命を知らざる科學

更に見よ、誤られたる科學は、人生觀の全部をその目に見える方面に（それも意識を通して吾々に解るのであるが）動物的存在の上に置いて、これ等の外觀的現象を先

づ動物としての人間の中に研究し、更に一般動物の中に、植物の中に、物質の中に研究して行く、而もその間絶えず、自分達の研究して居るのは、小數の現象ではない、生そのものだと斷定して居る。この觀察は隨分複雜で、變化が多くて混亂して居る。そして隨分多くの時間と努力とが、その爲めに浪費されて居る。その結果として、人々は次第に、主體の一部を主體の全體だと見る最初の誤りを忘れて來て、遂に物質、植物、動物の外觀的事物を研究することは、生命それ自らを研究することだと思ひ込んで了ふ樣になつた。しかし生命は、唯意識を透してのみ知られるのである。

一月十六日　誤れる教說

「人生を定義することは無用だ。そんなことは誰でも知つて居る。自分達は唯、生きればいゝのだ。誤られたる教說を奉じて居る人々はこんなことを云ふ。人生の何であるかを知らず、幸福の何であるかを知らない彼等には、それが生きて居ることだと思はれるのであらう。それは波にゆられるにまかせて、その行方をはからない人が、自

分は自分の行き度い處に行きつゝあるのだと思つて居るのと同樣である。

一月十七日　生活しない人

一人の人がその子供の時代を動物のやうに生存する。彼は人生に就ては何事をも知つて居ない。その人がもし、十ケ月生きて居たとするならば、彼は自らの存在に就いても、他人の存在に就いても、何事をも知つて居ないであらう。これは母の胎内で死んだ子供と同樣なのであらう。これは唯に子供ばかりでなく、智性の發達しない大人や全く白痴に於いても同樣である。從つて彼等は何等人間生活と云ふものをして居ないのである。

一月十八日　普遍我

……人が自らの知覺に就いて考察して居る場合に、知識的存在としての自分が斯く斯くの年代に生れた誰々の子であるとか、孫であるとか云ふことを考へはしない

のである。むしろ彼は、彼の意識を通して、他の想像家達と一つになつた彼自らを見出すのである。その思想家達は時間や場所に於ては彼と甚しくかけ離れて居る。時としてはそこに一千年のへだゝりのあるものもあり、洋の東西を異にして居るものもあるのである。智的意識に於ては彼は決してその起源を見出すことは出來ないが、時間空間から獨立して居る他の智的意識と合一して、彼等が自分の中に入り自分が彼等の中に這入つて居る自分自身を見出すことが出來るのである。

一月十九日　開眼一歩

吾々の世界の人々が、眞實な生活に入る場合には、丁度女性の自然性を祕密にされて居た娘が經驗する心持と同じ心持ちを經驗する。姙娠の兆候を感じ出した斯うした娘は、彼女に母としての義務を果させる爲めに起つて來る樣々な肉體上の狀態をひとへに不健全な不自然な狀態だと思ひ込んで了つて、遂に失望に陷るのである。眞實な生活の目ざめの最初の兆候に接する吾々の世界の人々も、此と同樣な失望を感ずるの

である。

一月廿日　あらはなる生命

かの日時の經過を觀察し、人間の中の生命の現れて來る狀態を觀察して見ると、々は穀物の種子と同樣に、人間の中に眞生命の貯へられて居ることを發見するのである。そして或る時期が來ると此の生命が現はれて來ることを見るのである。

一月廿一日　生の分裂

理性が目ざめては居るが、自己の生活を人間の唯一の生活として認めて居る人は、その生活を物質の運動だと考へ、自己の個性を認めないで、唯物質の法則に隷屬させて考へて居る動物と同樣な苦痛を經驗せねばならない。斯うした動物は、苦しい內面的な矛盾と分裂とを經驗するであらう。物質の法則に自己をまかせて居る彼は、靜に

坐つて呼吸をして居るのが自分の生活だと考へるであらう。しかし彼の個性は更に他のものを要求する。その時に此の動物は、分裂と矛盾とに苦しんで居る事を感じるであらう。彼は斯う獨語するであらう。「生活は引力の法則に從ふ事卽ちぢつとして動かないでをること、體內に動いて居る化學的變化に從ふことに依つて成立つて居る。そして私はそれをやつて居るけれども私は動かなければならない。食物を求めなければならない。」此の動物は苦しむであらう。そして此生活狀態の中に苦しい矛盾と分裂とのあることを認めるであらう。

一月廿二日　より高き生

動物的個人性の法則をその生活の法則として認めることを敎へられて來た人々も、此と同樣なことを經驗するであらう。人生最高の法則たる彼の理性の法則は、彼に或るものを要求するであらうが、彼の周圍の人々や誤られたる敎說は、虛僞な意識の中に彼を引きとめて置かうとするのである。

けれども此の動物は、此苦しみから逃れる爲には物質の低級な法則をすてゝその個性の法則を取らなければならない。その時に初めて、物質の法則が個性としての彼の諸目的を達せしむる力となるのである。之と同樣に、人がその低級な個人的法則をすてゝ、それをも含めて居るより高い法則――合理性に依りて現はされた法則――を認める時に、彼の矛盾は消えるのである。その時に個人として彼は自由にその智的意識に從うて、その利益を享受することが出來るのである。

一月廿三日　必然な眞生命の出生

此の時物質界のあらゆる出生に起るのと同じやうな事柄が起つて來る。子供が生れて來るのは、自ら生れ度いと思つてゞもなければ、生れる方が都合がよいからでもなく、生れるのは善いことだと知つて居るからでもない。唯準備が出來上つて、この上これまでのやうな生存を續けることが出來なくなつたからである。彼が新らしい生活を初めねばならなくなつたのは、新しい生活がそれを呼び出したと云ふよりも、むし

ろこれまで通りの生存の可能性が破れたからである。

何時となく生ひ立つて來た理性が、彼の個人的生活を不可能ならしめる程になつて來たのである。

……吾々が理性の發達を充分に知り得ないのは吾々自身がそれを果しつゝあるからである。吾々のいのちとは、吾々の中に生ひ立つて來る此の不可見な存在の出生に外ならない。從つて吾々にはそれが見えないのである。

一月廿四日　理性と動物性

吾々が此の新らしい存在、理性と動物性との此の新しい關係を見得ないのは、種子が自分の莖の成長を見得ないのと同樣である。理性がその隱された狀態を破つて、吾々に現れて來る時に、吾々は一つの矛盾を經驗するやうに感じる。しかし實は矛盾なんどはないのである。萠え出づる種子に矛盾がないのと同樣である。吾々が萠え出づる種子の中に認めるものは、これ迄種子の外殼の中にひそんで居たいのちが芽になつて

出て來たと云ふに過ぎない。理想の醒めて來る人間に於ても之と全く同樣である。そこに何等の矛盾があるのではない。唯新しい實在の出生と、理性と動物性との新しい關係が出て來たと云ふに過ぎない。

一月廿五日　新生活への突入

人が若し他人の存在を知らず、快樂が自己を滿足させない事を知らず、死の時の來ることを知らないで存在して居るならば彼は自分の生きて居ることを知つてさへも居ないだらう。そして彼の中には矛盾がないだらう。しかし若し或る人が、他人も自分と同樣であること、苦痛が自分をおびやかすこと、生存は緩漫な死であることを知るならば、彼はもはやその生活を、かの分解されつゝある人格の中に置かないで、必ず彼の前に開けて居る新生活に入らずに居られないだらう。そしてそこには再び矛盾がないであらう。それは芽を出した後死ぬる種子に、矛盾がないのと同樣である。

一月廿六日　物質と生命

たとひ人體内の物質の變化が、人間の活動を犯して來るとしても、それは單に物質の變化が人間活動に影響する原因の一つであることを示すにすぎない。物質の活動が人間活動の一原因だと云ふ證據にはならない。植物の根から土を拂つて了つた爲めに植物が害を受けたからと云つて、植物が出て來るのは只土壤の爲めばかりだと云ふことが出來ないと同樣である。

一月廿七日　意識の法則

動物我を理性の法則に從はせて到達する幸福への向上が人生であると云ふことを人は知つて居る。

彼はこれより外の人生を知つては居ない。また知る事が出來ない。何故なれば、その人が動物を生物として認めるのは、その動物を形成して居る物質が、物質の法則に

従つて居るばかりでなく、更に高い有機的構成の法則によつて居る時に於いてばかりであるから。

これと同じやうに吾々自身を一個の生活者として認める場合の吾々は、有機的構成の法則に従つて居る場合の吾々であるばかりでなく、更に高い意識の法則に従つて居る場合の吾々である。

一月廿八日　動物我より理性我へ

狂氣、慟哭、亂醉に陷つて居る場合、或は情慾の強く迸り出て居る場合の人間の活動が、如何程力強い敏速なものであつても、吾々はその人を生きて居る人と認めることは出來ない。また生きて居る人間として彼に對することは出來ない。彼には只生活の可能性があると云ふに過ぎない。しかし如何程弱く不活潑な人であつてもその動物我が理性に従つて居る人を見る時には、吾々は彼を生活者として認めて、そのつもりで彼に對するのである。

動物我を理性の法則に従はしめるものとしてより外に人生を理解することは出來ない。

一月廿九日　動物我の運命

どれ丈け理屈を云つて見ても、人間の個人的存在が絶えず死に向つて急ぎつゝあること従つて動物我の中に生命のあり得ないことは、蔽ふことの出來ない眞實である。

一月卅日　自我の材料

動物はその生存を果すために物質や物質の法則と戰つて之を服従させるがその物質や物質の法則は動物が目的を果す上の障害ではなく、材料である。物質と其法則に従つて働いてこそ動物は生きるのである。人生に就ても之と全く同様である。人間の中にあつてその理性に従ふべき動物的人格は、幸福に到達する障害に非ずして、その材料である。「凡そその生命を惜むものは之を失ひ、我が爲めにその生命を失ふものは

之を得べし」

此言葉の中に、吾々は惜しまずして失ひ、而も絶えず失はねばならないことが宣言せられて居る。滅び行く吾等の動物我を棄てる時に初めて、滅びない眞生命を得ることが明かにせられて居る。吾々の眞生活は、人生でないもの――動物的生存――を人生だと思ふことを止めた時に初まることが明かにせられて居る。

一月卅一日　新生とは？

「爾曹新たに生れざるべからず」と基督が云つた。これは誰かの命令ではない。人間は必然に此處迄行かずに居られないのである。生命を見んが爲には智的意識の新生命に甦らずには居られないのである。

享樂を追ひ求めて居る人は、此れらの言葉を聞いてもそれを受け入れないばかりでなく、それを理解することも出來ない。これらの言葉は、彼等に取つては或る感傷的な神祕的な氣分を現して居るものとしてより外には、何等の意味を持つて居ない。……

……動物我と智的意識との內的矛盾を感じる迄になつて居ない人が、理智の太陽の光りを無意味な偶然事だと思ひ、感傷的な神祕的な言葉に過ぎないと考へるのと同樣である。生命がすでに目ざめかゝつて居る人にのみ、此の太陽が生命を貫いで來る。

何うしてそれが目ざめて來るか、それは誰にも解らない。何故に？何時？何處に？（人間にも動物にも）。その起源に就ては、基督は誰にも解らないと云つた。生命は人間の光であり、萬物の始めである。何時それが出て來たかゞ何うして人に解かるだらう生命のないものは起つたり滅んだりする。そしてそれが時間空間の中に現はれる。しかし眞實な生命は實在して居るものであるから、始まることも滅びることも出來ない。

二月一日　個人的存在は？

個人的存在を不可能ならしめるものは何であるか？第一は個人的幸福を求める爲めの生物間の爭鬪である。第二は享樂と誘惑が人生を浪費と飽滿と苦痛とに導くことである。そして第三は死である。……

二月二日　眞の幸福

「他人の幸福を自分の幸福とするなどゝ云ふことは不可能だ」と云ふが、自分と別な他人の幸福が、自分の幸福になつたと云ふ或る狀態を知らない者が何處にあるだらう。

「他人の爲めに勞働したり苦しんだりすることを幸福だと思ふことは出來ない」と云ふ。しかし一度慈愛の感情に從ひさへすれば、個人的快樂はその意義を失つて了つてその生活の力は凡て他人の幸福の爲めの勞苦に移される。そして勞苦が彼の幸福になる。

「他人の幸福の爲に自分の生命を犧牲にすることは出來ない」と云ふ。しかし此感情を認めさへすれば、死はもはや眼に見えるものでも恐ろしいものでなくなつて人間最高の祝福とさへ思はれるに至るのである。

二月三日　調和に向ひつゝある人生

歷史に於いて何人も認めずに居られないことは、生の運動は常に生物間の不調和を除去し爭鬪を少くすることにあると云ふことである。世界が、理性の法則に從つて怨恨と不調和とから調和と結合とに向つて益々近づいて行つて居ることである。

囚人や其子供達を殺す習慣の無くなつたことゝ人を殺すことを誇りとして居た武士達がその誇を失ひつゝあること、動物を殺すのを習慣として居た人がそれを殺すのを少くし、馴れしめ初め、來たこと、動物の肉(屍體)を食はないで、その卵や乳を食料に供し初めた事、植物をもなるべく殺さないやうにし初めたこと、それらは凡てこれを示

して居るのではないか。

二月四日　信仰

信仰は希望でもなく輕信でもなく、靈の特別な狀態である。信仰は人間が世に於ける彼の地位が彼をしてある種のことを爲さしめないでは居られないやうな種類のものであると云ふことの自覺である。人間が彼の信仰に從つて行動するのは、見えざるものを見えるものゝやうに信ずるからでなく、また、彼の期待を達しようと希ふからでもなく、宇宙の間に於ける彼の地位を定義したので、自然と彼がその地位に從つて行動するからである。

二月五日　個人性と眞生命

「個人性を捨るなどゝ云ふことは不可能である」と、それらの人々は故意に問題を變

へて、個人性の法則に從へさせると云ふことを、個人性を捨てゝ了ふことゝ同じであるやうに云ふ。

彼等は云ふ。「そんな事は不自然だ。だから不可能だ」。しかし誰も個人性を拒否せよとは云つて居ない。理性的人間に於ける個人性は動物に於ける呼吸や血液循環と同じである。動物から血液循環を拒否するとは一體何の事なのか。そんな事は議論するのも不可能である。理性的人間が個人性を捨てると云ふことも同樣に不可能である血液循環が人間の動物的存在の一條件であるやうに、個人性は理性的人間に缺く可らざる生活條件である。

二月六日　愛と理性

人生の總べての矛盾を解決して最大なる幸福を與へる感情をこれらの人々は知つて居る。此感情は愛である。

人生は理性の法則に從つた動物的人格の活動である。理性は、動物的人格がそれ自

らの幸福の爲に服從せねばならない法則である。愛は人類の唯一の理性的活動である。

動物的人格は幸福を求める。理性は個人的幸福の虚妄を證明して、たゞ一つの道を殘す。この道に從つた活動が愛である。

二月七日　斷乎として拒め

若し汝にして基督が虐殺を禁じたと信ずるならば、然らば、汝をしてその仲間入りをさせうとする人々の議論をも命令をも信ずるな。汝が斷乎として、暴行に參與する事を拒否することによつて、汝は、汝自身の上に、之等の言葉をきいて、それを履行する人々の祝福をよぶであらう。そして世界も亦汝を人類の更生に寄與せるものとして尊崇するに至るであらう。

二月八日　眞の生活

人類の過半數はかくの如く人生を解して居ると云ふ事實、最も偉大なる人々も之と同じ樣に人生を解して居たと云ふ事實、これより外には解しやうがないと云ふ事實、これ等の事業に就ては、彼等は少しも心を用ゐて居ない。彼等は電話や喜歌劇や黴菌學や電燈やその他のものに依つて、人生の諸問題が――充分滿足な解決を得たと云ふのではないが――影をひそめたと確信して居る。それ故に彼等は個人的生活を捨てるなど、云ふことは、昔の無智の反響に過ぎないかの如く考へて居る。

しかし涅槃に入るが爲めに個人的幸福を捨てやうとして、數年間一本の足で立つて居たと云ふ最も亂暴な印度人の方が、鐵道で全世界を飛び廻り、電燈で自らの獸慾を見せびらかして居る獸のやうな今日の歐羅巴人よりも遙かに生命のある人間であると云ふことに就ては、彼等は少しも考へて居ない。

二月九日　愛

愛は將來にはない。愛は唯現在の活動である。現在に愛を發表しないでは愛を持たない人である。

二月十日　肉體的活動と精神的活動との一致

人は自然に、物質的（肉體的）活動と合理的（精神的）活動とを一致せしめようと願つてゐる。彼は何うにかして、それを一致せしむるまでは平安を得ない。然しそれに達するには二つの異つた方法がある。一つは、或る一つの動作又は諸動作の必要と欲求とに對し理性を用いて決定を與へ、その決定に基いて行動することである。他の方法は、感情の力によつて行動し、然る後にその爲したる行動に對する智的説明、もしくは辯明を發明することである。

二月十一日　愛と自己否定

吾々は幾度斯う云ふ言葉を聞かされた事だらう。「どちらにしても私には同じ事だ。私は何も要らない。」そして此の言葉の中には、人間に對して愛のない樣子が見える。しかし人々に對して不快を感じて居る瞬間に、少なくとも一度、眞實に心の奥底から、「どちらにしても私には同じ事だ、私は何も要らない」と云つて見よ、そして唯の一時でも、自分に關する慾望を絶つて見よ、彼は必ず此の單純な內的經驗を通して、如何に速かに、彼の誠意の程度に從つて、凡ての惡意が消え去るかを見るであらう。そしてその後に、これ迄閉されて居た人類に對する愛情が、如何に彼の心から迸り出るかを見るであらう。

二月十二日　愛と生命

生きて居る人間のうち、祝福に滿ちた感覺を知らないものが何處に居るだらう。殊

にこれは魂の展びやかな少年時代の初期には誰しも幾度か經驗する心持ちである。――あの喜ばしい情緒を以て彼はあらゆるものを愛しやうとして居る。自分に近い父や母や兄弟や、殘酷な人々や自分の敵や自分の犬や馬や、一葉の草をも愛しやうとして居る。更に彼はも一つのことを望んで居る。――あらゆる人の幸福を望んで居る。彼は凡ての人の幸福と喜びとの爲めに自分の全生命を與へやうとして居る。これがそしてこれのみが、人間の生命を姙むで居る愛である。

二月十三日　愛と自我の犧牲

人の爲めに生命を棄てることより外に愛はない。愛をして愛たらしめるものは、唯自我の犧牲である。一人の人が他の人の爲めに其時間と力とを費すばかりでなく、愛するもの〻爲に其肉體を勞し、その爲に生命を棄てるもの――これがかりが愛である。此の愛が人間にあればこそ世界が立つて居る。子供を育てる母親は、子供の哺育の爲めに彼女自身を、彼女の肉體を、直接に子供に與へる、これが愛である。之と全

く同樣に他人の善の爲に働くあらゆる勞働者は、其肉體を疲れさせ自分を死に近づけて、他人を養はんが爲めに其肉體を與へて居る――子供を乳母に育てさせる母親は、決して子供を愛することが出來ない。金錢を求め金錢を貯へる人は愛することが出來ない。

二月十四日　愛と理性の太陽

愛の若芽は其現れる時には未だ軟かい。手で持つことも出來ない程である。それが力强いものになるのは、成長した後である。人間が手をつければつける程、若芽は害を受けるのである。しかし只一つのことが要る。即ち理性の太陽からそれを隱さないやうにすることである。理性のみがその成長を助けるものである。

二月十五日　死は存在せず

「死は存在しないと」眞理の聲が云ふ。「我は復活なり生命なり。我を信ずるものは死ぬるとも生くべし。凡て我に生き我を信ずるものは死ぬることなし。爾曹これを信ずるや」

世界の大敎師達は「死は存在しない」と云ふ。人生を理解して居る幾万の人々も之と同じことを云つて居る。そして自らの生活でそれを證明して居る。そして魂の明かになつて居る瞬間には、誰も之と同じことを感じるのである。しかし人生を理解しない人々は死を恐れるより外に途がない。彼は死を見てそれを信ずる。

二月十六日　眞の自我

私は五十九年間生きて來たがその間私は私自身を私の肉體の中に意識して來た。そして此私自身の意識は私の生命であつたらしい。私は生きて來たが、それは五十九年

間でもなく、五萬九千年間でもなく、五十九秒間でもない。私の肉體もその存在の長さも、私の自我の生命を決定しない。若し私が生活の各瞬間に「私は何だ？」と自分に向つて尋ねるならば、私は「考へたり感じたりする或る者だ」即ち、全く獨特の態度で世界に對して居るものだと答へるだらう。

私は此の自我をのみ、私の自我と認める。何時、何處で私が生れたのか、何時、何處で今のやうに考へたり感じたりし始めたのか、そんな事は私は全く知らない。

二月十七日　物質と意識

それならば、私の生存中私は只一人の私であつたと云ふことは、如何なる基礎に於て肯定さるべきものであらうか。私の肉體は決して一個のものではなかつた。今も一個のものではない。それは不斷に消費されつゝある物質である……

私の肉體が一個のものであるのは、此變化しつゝある肉體を一個のものとして許す

物質ならざる或るものがあるからである。この物質ならざる或るものを吾々は意識と呼んで居る。此意識が肉體の全部を把握して、それを一個のものとして認めるのである。此のあらゆるものから獨立した私自身に對する意識なくしては、私自身の生命をも他人の生命をも知ることが出來ない。それ故に一寸考へると、萬物の根底たる意識は不變なものゝやうに思はれる。しかしこれは誤つて居る。意識は不變なものではない。吾々は毎日睡眠の現象を繰り返して居る。この現象は毎日誰にでも起つて來るものであるから、極めて簡單な事のやうに思はれるが、意識が睡眠中全く止つて了ふと云ふ自明の事實を認めるならば、此の現象は全く理解し難いものになつて來る。

二月十八日　意識の流動性

二十四時間毎に、吾々が熟睡して居る間、意識は全く止まつて居る。そして其後に又續いて行く。しかし其間にも、此同じ意識が肉體の全部を掴んで居る唯一の基礎である。それ故に意識が止まると同時に肉體がばら〳〵に分れて、その獨立的存在を失

はねばならない樣に思はれる。しかしそんな事は決して起らない。

……加之、此の意識も亦肉體と同樣に變化するものである。十年前の私の肉體と今日の私の肉體との間に共通したものがない樣に――同一の肉體でない樣に、私の意識も同一のものではなかつた。三歳の子供であつた頃の意識と今日の私の意識との間には、私の肉體と同樣な變化がある。意識は決して單一なものではなくして、無限に分けることの出來る一個の連續狀態をなして居る。

二月十九日　意識と死

吾々の肉體は一個のものでない。また此の肉體を一個のものとして、又自分のものとして認めるものも、時間的に繼續したものではなくして、常に變りつゝある意識の連續である。吾々は幾度か吾々の肉體と吾々の意識とを失つたのである。吾々は絶えず此の肉體と意識とを失ひ刻々此の意識の變化を自ら感じて居るが、しかし少しもそれを恐れない。

それ故に吾々が死に依つて失はれることを恐れて居ると云ふやうなものがあるとすれば、それは肉體の中にあるものでなく、覺醒中の意識の中にあるのでもなくして、一つに統一された連續した意識の狀態の全聯鎖の中にあるものである。

二月二十日　根本意識

時間的に連續する意識の凡べての狀態を一つに結びつける或る者とは何であるか。時間的に連續する樣々の意識を、一本の弦の上で奏で出す根本的な自我とは何であるか。此の疑問は極めて深刻なもの〻やうに思はれるが、しかし子供でも此の疑問に答へて居る。

「私はこれを愛するがあれをし愛ない」

此の言葉は簡單であるが、その中には全意識を結合する獨自の我に就いての疑問を解くものがある。これを愛してあれを愛しないか、それは誰も知らない。同時に、あらゆる人の生活の基礎を作るものがこれであり、あらゆる人の意識の凡ての狀態を結

合するものがこれである。

二月廿一日　選擇と勇氣

「さうだ」と私は言つた。「どんな危險にも撰擇があるやうに私には思はれる。そして例へば、義務といふ觀念の影響からなされた撰擇は勇氣と云へる。だが、いやしい感情の影響からなされた撰擇は卑怯と云ふものだ。だから虛榮とか好奇心とか貪慾とかいふものから、命掛けの仕事をするものを、勇敢など〻言へるものではない。だが、そうでなくて、家族に對する尊敬すべき義務といふ感情から又は、全然良心的な根據から危險に向ふのを拒むものを卑怯者だなぞと言へるものではない」

二月廿二日　自然

「全自然は平和を與へる力と美に充ちて居る樣に見えた。この無限な星空の下に、

この美しい世界に、人々が平和に生きる充分な餘地は無いのか？何故この恍惚たる自然のなかで、憤怒と復讐と、そして仲間を殺さうとする慾望が人の心靈のうちに存在することが出來るのか？人の心理の凡ての邪惡は自然との接觸で消えもしようと誰も考へよう――美と善とが最も露骨に表現されて居るこの自然との接觸で。

二月廿三日　誰の番だ

「あゝ、青年のことだ！」

「さあ、どうして彼が喜ばずにゐられやう。僕には分る、青年士官にとつて實戰に臨むといふことは非常に面白いことに違いないのだ」

大尉は二分間口を利かなかつた。

「僕が言はうとすることも恰度それだ。青年のことだ」彼は低聲で言葉を續けた。

「實戰がどんなものかを知る前にどんな喜びがあるといふのだ。よく實戰に行くときそれを喜ばなくなるものだ。僕達がまア行軍中二十人の士官をもつてゐるとして見給

へ、中には殺される奴も、負傷をする奴もあるだらう。それは確だ。今日は僕の番だ明日は彼の番だ、そして其翌日が又誰かの番だ。それだのに何が喜ばしいことがあるのだ？」

二月廿四日　愛兒の死

「……人々は子供などは未だ幾許も出來るだらうぢやないかと云つて余を慰めて呉れる。が、わがソニヤは何處に居る事だらう？何日かも云つた事だが、彼の兒さへ元の様に生きることなら、余は敢て十字架の苦しみをさへ受けやうと思ふ。彼の小さい靈魂は何處に居るであらう？時の經つにつれて思ひ出は一層悲しくなる、死んだソニヤの姿がまゝ〳〵はつきり見えて來る。時々余は殆んど堪えられなくなる。彼の兒は最う余を見分ける様になつて居た。そして彼の兒の死んだ日だつたが、二時間も經つと彼の世の者にならうとは夢にも思はずに、余は新聞を讀む爲に其傍から離れやうとした時、彼の兒は凝乎と眼で余を見送り乍ら余を見つめて居た。それで余は今も猶其様

子を見る樣な氣がするのだ。其樣子がいよ〳〵益々はつきりと眼に浮んで來るのだ。余は決して其樣子を忘れぬであらう。縱令他に子供が生れる樣な事があつても、ソニヤを愛して居なけりやならないのだもの、何うして余は他の子供を愛することが出來るであらうか。余の欲するのはソニヤである」

二月廿五日　豚の死

其中の一人が小刀を以て豚の首を刺した。豚は叫んで身を引きもいで、血まみれでそこから逃げた、余は近視だから、殘らず正確に見なかつた、唯だ人間の肉體の樣に赤い色をした豚の體を見て、その絶望の鳴き聲を聽いたばかりだ。然し余の馭者は一々殘らず認めた。そしておつと見て居た。豚は捕へられ、打倒されそして全く殺された。叫喚が鎭まつた時馭者は重く溜息をついた。「實際貴方が何時か神樣の前に責を負はずにすむでせうか」とさゝ獨り語つた。

二月廿六日　木の死

「靜けさの中に、一種獨特な、自然と緣のない樣な音が響いて森の緣で消えた。梢の一つが戰えて、瑞々した葉はさら〳〵と音を立て始めた。斧の打擊は益々鈍い響を立てゝ汁氣の多い白い木屑は露を含んだ草の上に落ち、輕い戰えが打擊の中から響いて來た。木は上から下までびく〳〵と動いた、急に身を聳立てゝ根本までも搖れ乍ら震えた刹那、あたりはすつかり靜かであつた。然し木は急に曲つてめき〳〵と云ふ音が幹にした。梢は濕つた土の上に倒れ、それと共に、大枝小枝は折れ碎けた、斧の響と足音とは聞こえなくなつた。鶯が一聲鳴いて高くとんだ、鶯の羽を觸れた枝は一寸の間搖れたがやがて外の枝殘らずと同じくその總べての葉諸共に死んでしまつた。新しく出來た明るみの中に動きなき葉を持てる木々は前よりも一層喜ばしげに輝いた。

二月廿七日　生きんとする意思

我々が此等の若木を伐り倒して居る時、地の下にある液汁の多い根　切られ、そし

て我々が一本の木を四人掛りで幾ら一生懸命に引つ張つてもそれを引き出す事の出來ぬのを一緒に見なければならぬといふことが、時々私には苦しくなつた。それはあらん限りの力を盡して抵抗を試みた、そして死ぬ事を欲しなかつた。こんなに粘り強く緊着してゐるからには、木共は明かに生きんと欲してゐるに違ひない。

二月廿八日　何の聲ぞ

すべて仕事を果すのは歡ばしいものであるが、木を伐り倒す事も亦愉快なものである。——最初に斜に次に眞直に斧を打ち込んで切口を拵らへ、やがて益々深く木に切り込んでゆくことは、本當に樂しみである。余は已にもうカツプ櫻についての掛念を全然忘れて、ただそれを打ち倒す事ばかり考へた。結局余は斧を下に置き、其男と二人で幹に身を凭せかけてそれを押し倒さうとした。我々はそれをあちこちと曲げた。すると木は葉ぐるみ震へた。露が我々に滴り下つて白い香りのよい花が我々に降りかゝつた。同時に余には恰も樹中に物あつて叫んだ樣な氣がした——我々は今一度つき

押した。今恰も樹の中に一つの泣聲、それからめり〳〵といふ音が生じたと思はれた木は倒れた。口の所で裂けて、よろめいて、枝も花もぐるみに草の中に倒れた。枝と花とは倒れた後で震えてそして固くなつた。

「やアなか〳〵好い木だ！だが全く可愛さうだな」と男が叫んだ、余も亦非常に不憫な氣がしてならぬので急いで他の勞働者の方へ行つた。

二月廿九日　何時始まつたか

「いつ余は始まつたのであらうか。余が見、聞き、了解し、物を言ふことを覺えた時に余は生きてゐなかつたのか。余が眠り、乳を飲み、母に接吻し、笑ひ而して母を喜ばした時には？余は生きて居た。しかも幸福に生きてゐた。其後の余の全生涯に於けるよりも、其頃は一層多く又一層遠かに自分の物としたのではなかつたか。五歳の子供から今の自分に至るまでは唯だ一歩のみである。生れたばかりの子供との間には恐ろしい隔りがある。胎兒から生れたての赤兒までには深淵がある。非有から胎兒まで

は、もはや深淵はない、測り知るべからざる者がある。

三月一日　理想

耶蘇が吾々に與へた完全と云ふ理想は決して空想でもなければ、修辭的說法の題目でもない。道德的生活を送る人々にとつては何人とも近付き得る最も重要な指導である。

それは丁度羅針盤が水夫を指導するに重要なしかも得易い機械であると同じである。

羅針盤の要を認めるものは、又同時に耶蘇の理想の要を是認しなくてはならない。

耶蘇の與へた理想の教義は、如何なる地位に身を置いて居る人々にも、常になすべき事なすべからざることの確實な指表を充分に示すに足るものである。

けれども心から全く此教を信じなくてはならない。單にそれのみを信ずべきである他のあらゆる教の信仰を捨てなければならぬ。

これを譬へて見れば、丁度水夫は羅針盤のみを信じて、左右に見える事物に依ることを避けなければならない様なものである。

三月二日　意思の訓練？

一八五一年三月二日

何んなに自分を改更しやうと努めても、一向其効果のない事を知つた時、余はうんざりせざるを得なかつた。何故斯んな考へが起つたかと云ふと、其れは意思の現はれる形式を度外視して、専ら己れの意思の訓練にのみ努めた結果である。余は此の大なる謬見を改めやうと思つて居る。

三月三日　性慾

性交に關しては既に「クロイツエル・ソナタ」の跋文の中で充分意見を述べて置いた。要點は次の一語に盡きる。即ち人は常に結婚生活と獨身生活とを問はず如何なる

境遇にあつても、キリスト及び其弟子ポーロの云つたやうに、出來得る限り貞潔でなければならない。人にしてもし節慾して、全く女子を知らないでゐる事が出來るならば、これ實に人間として實行し得る最良の行爲である。けれども禁慾生活に堪え得ないとすれば、宜敷く此弱點に從ふ機會を出來るだけ少くし、性交を以て快樂と見做すが如き事が斷じてあつてはならない。苟も眞面目な人であるならば、此問題を自分と同じやうに考へて此の意見に同意するだらうと思ふ。

三月四月　淫逸

男女の淫逸は取りも直さず、一人ならぬ多數との性交快樂を目的とする事から起る不安の狀態であり、珍を求める（酩酊のやうに）狀態である。淫逸な人は自分を抑へることは出來やう、けれども爛醉は、要するに爛醉であるし、淫蕩は淫蕩である。制慾の糸を緩めた最初の瞬間に彼は墮落するのである。

三月五日　貞一潔

君は絶對に貞潔たり得なかつたこと、又絶對に貞潔たり得ないこと、貞潔へ接近するある階段にあること、接近するにあたつて元氣を失ふべきでない事、を忘れてはならない。誘惑の瞬間にも、墮落の瞬間にさへ、君の渇望する物に向つてゐるのであることを意識して「吾は墮落せんとして居る。吾は墮落を忌む。今こそ望まれないが、いつかは勝利が彼にあらずして、吾の有に歸することを知つて居る。」と君自身に向つて云ふことを止めてはならない。

三月六日　結

性慾との苦闘は、あらゆる苦闘のうちで一番困難である。幼年期と老年期とを除いては、それから離れる餘地もなければ時もない。それ故、性慾との苦闘に失望してはならない事は云ふ迄も無い。けれども亦其苦闘のなくなる樣な狀態に達し得ると云ふ

が如き事を豫期すべきでもない。一瞬時も撓まずに、敵を征服する一切の方法手段を利用しなくてはならない。更に心身を刺戟する樣なものを避けて、心身を充實させる必要がある。これ苦闘に打勝つ一方法である。今一つの方法は、何うしても苦闘に打勝ち得たいならば、結婚すると云ふことである。言ひ換へれば、喜んで結婚を承諾する女子を選んで結婚し、自分に向つて若し禁慾を何うしても出來ないなら、只其女子とのみ關係しようと誓ひ、生れた子供を其女子の教育で何かに仕立てゝ、女子を世話しながら女子と共に貞潔に到達すべきである。其場合は云ふまでもなく、早く結婚するに優つた事はない。わけても今云つた二つの方法を用ゐる爲には、神と自分との合體に努力しなければならない。

三月七日　性慾の考え方

私は近頃、アリス・ストックハム女史より贈つて貰つた、同女史の所謂「創造力」に關する小冊子を愛讀した。女史の云ふには、人がいろ／＼な自然な職能以外に、性

的要求を經驗するときは、其要求は性慾と云ふ低い表白形式を取つてのみ現はれる創造的要求に外ならないことを知らなければならぬと。

即ち性的要求は、創造的能力であつて、意志と強い努力とによつて、更に別の肉體的、否寧ろ更に精神的活動力に移し得る性質を帶びたものである。

三月八日　夢

性慾の襲撃は思想を混亂させるものである。否寧ろ思想を滅ずるものであると云ふのが至當である。全世界は暗黑となる、人は世界との關係を斷つて終ふ。偶然と暗黑と敗北と！君は此恐ろしい情慾、殊に放任して赴くがまゝに赴かしめた時に、この情慾のために、ひどく苦しむだ。私は情慾が極端にすべてのものを暗くすると同時に、又非常に精神と理性との依つて行く一切の物を破壞するものであることを知つてゐる併しこゝに一つの救濟手段がある。外でもない。情慾は夢であり、過ぎゆく蠱惑（コワク）に過ぎないから、いつかは眞の生活、言ひ換へれば情慾に驅られなかつた前の狀態へ歸つ

てゆける事を自覺するにある。情慾の力に襲はれてゐる瞬間でも君は此の事實を知る事が出來る。幸福であれ。

三月九日　情慾に勝つには

……情慾と闘ふには如何なる武器によるべきかとは君の質問である。勞働とか、斷食と云つたやうな微力な手段のうちで、最も有効なのは貧である。即ち金錢を身につけないで、外見を貧弱にする事である。要するにあらゆる女子から秋波を送られないやうな地位に身を置くにある。けれども私の知つてゐる、最良策は小歇みない闘ひである。

又闘ひは偶發的な一時の狀態に非ずして、撓みない人生不變の狀態であると思ふ意識である。

三月十日　價値ある貞潔

基督は貞潔を說いてゐる。けれども其貞潔は、他の諸德と同じく意志の努力によつて到達され、信仰によつて支へられて行く時にのみ價値がある。罪惡を侵す可能性なくして到達される時には何等の價値もない。

三月十一日　結婚と性慾

……私は結婚上の性的關係を不德義なものであるとは思はない。けれども斯うと云ふ斷定を下す前に、私はもつと眞面目に此問題を考へて見たい。蓋し妻との性的關係と雖單に淫慾の滿足を目的とするのであれば、云ふ迄もなく罪惡であるとの說にも眞理がある。自己を傷けて不具になるのも、快樂のために性交を結ぶのも共に罪惡であると思ふ。

同時に又食ひ過ぎをするとか、飢餓や毒藥のために身體を衰弱させるのも罪惡であ

ると思ふ。只人類に貢献し得る程度で身體の健康を計るための食物が正當であり、又人種を保存しゆく程度の性的關係がよろしきに適つたものではあるまいか。

三月十二日　結婚、戀、成算

凡そ青年に達した者で充實した生活を送らうと願ふなら、結婚すべきである。けれども決して戀からの結婚ではいけない。成算的のものでなければならない。――けれども世間一般に解して居るとは全く違つた意味で、戀と成算との二語を理解する必要がある。言ひ換えれば、人は肉感的愛からでなく、成算的結論をしなければならない――何處で何うして生活すべきかの問題についてでなく、（吾々は皆此點を配慮するが）未來の夫婦はどの位人間生活を送るに對手を助け、又は妨げるものであるかと云ふ成算を云ふのである。

三月十三日　男と女

よく御覽なさい――彼等は女を釋放してやつて、男の持つてゐるあらゆる權利を女

に與へてやつて居る。しかも猶、依然として女を享樂の方便と見て、此の意味合ひで若い時から、輿論に從つて之を教育してゐるのです。從つて女は昔ながらに、下賤にされた、腐らされた奴隷に過ぎません。男は昔ながらに、道義上墮落した奴隷使用者に過ぎません。私達は教育機關や選擧權に就いて女を釋放する。さうして、それにも拘らず、女をば享樂の對象と見てゐるのです。

三月十四日　放蕩

放蕩の要點は肉體的の何かにあるのではない、――肉體的の亂暴はまだ〳〵放蕩とは言はれません――放蕩は、本當に放蕩の名に價する事實は、肉體上の交りを結んだ女と一切の道德的關係に立つことを避ける處に成立するのです。

三月十五日　肉的愛情

基督教の理想は、隣人及び神に對する愛である。神と隣人とに奉仕するために自己

を虛くする事である。肉體的愛情は、結婚は、自己に奉仕する事である、從つてそれは如何なる場合にも神及び人に對する奉仕の障礙である。從つて基督教的見地よりすれば――墮落である。罪惡である。

三月十六日　肉體的愛情の否定

男性と女性とは、結婚前も結婚後も等しく、戀愛と之に結合せる肉體的愛情とを、今日彼等がやつてゐるやうに詩的な、崇高な狀態と觀ずる事をやめて、人類を低下せしむる動物的狀態と觀ずるやうに、家庭に於ても輿論によつても、教育されなければならない。

三月十七日　理想とは？

理想の理想たるは、唯、その實現が想念に於てのみ（思想上にのみ）、可能である

場合に限られてゐる。それが無限に於てのみ到達し得べきものとして現れる場合に限られてゐる。從つて理想に接近するの可能性が無限な場合に限られてゐる。理想が到達し得べきものならば――否、吾人が理想の實現を想ひ浮べる事が出來るだけでさへも、もうそれは理想としての性質を失つて了つてゐる筈である。基督の理想――神の國を地――に築く事――は此の如きものである。それは、凡ての人が神を認識し、その劍を改鑄して犂頭となし、其槍を鎌となし、獅子は子羊の傍に臥し、凡ての存在は愛に於いて一つになる時早晩來べし、と豫言者達が既に豫言してゐた一つの理想である人間生活の意義の全體は、此の理想の方向に於ける努力に於いて成立するのである。

三月十八日　子の出生を恐れる性交は？

性的交通の有り得べき結果から、即ち子供から、身を避けるか、若くは、此の結果から來る重荷の全量を女性の上におしつけるか、若くは、產兒の虞れを防遏するやうな、そんな性的交通を行ふことは此の如き性的交通――、單純を極めたる道德上の

要求に背反するものである事、それは卑しい所業である事を、卑しい生活を欲せざる未婚男子はそれを行ふ可きではない事を此等の事を理解して置く事が必要である。

三月十九日　遊廓

兩親は醫者の勸告に從つて、自分自身の子のために、放蕩の心配をしてやつてゐる。人民の道德的健康のために意を用ひる點にその唯一にして單獨なる意味を持つ政府は放蕩のために設備を整へてやつてゐる。換言すれば、架空に構想されたる男子の要求を滿足させるために、肉體的にも精神的にも壞滅せずにはゐられぬやうな、女性の一大階級を拵へ上げてゐる。さうして、未婚の男子は申分なく平靜な良心を以て、放蕩にその身を委ねてゐる。

三月廿日　眞の貞操

貞潔の行をする事が出來るためには、單に自然に合する生活を送るやうに努力す可

きのみならず、又酒を飲まず、過度に食せず、肉を甞味せず、如何なる勞働をも避けず――運動ではなくて、骨の折れる、遊戯に類似せぬ勞働である――その思想内に於て、諸他の女性と交接し得べしとする考を擯斥しなければならないのである――實にあらゆる人間が、その母と、その姉妹と、その親近と、その友人の妻と、交接し得べきものとする考を擯斥してゐると丁度同じ様に。

三月廿一日　金を作りたいと云ふ心

彼の支配人は職につくと農民達をひどく苦しめ初めた。彼には家族――妻と、結婚した二人の娘――が在つた。そして手段の善惡を問はず、金をつくりたいと云ふ心があつた。それはこの人は野心もある上に全く心のわるい人だつたからである。彼は農民達に強制勞働をもつて實限以上の仕事を強ひはじめた。煉瓦製造所を造つて、その煉瓦を賣つて金をつくるために、彼等（男は云ふに及ばず女迄も）の生命のある限り仕事をさせた。

三月廿二日　結婚前の性交

今日の善い青年に接する毎に常に私の興味をひく質問を彼にして見やうと云ふ考が私の胸に浮んだ。

「どうだね」私は云つた「こんなことを訊くのを許してくれ、だが、しかし眞個のことを云つてお呉れ。全く少しも答へないか、それとも全く眞實のことを云つておくれ……」

彼は靜かにそして注意深く私を見た。

「えゝ答へますとも」

「お前さんはこれまで女と關係した事があるかね」

何等の躊躇もなく彼は單純に答へた。

「神様のお護りでそんな事は少しもありませんでした」

「それはいゝ、ほんとにいゝ」私は云つた。「お前さんのために喜ぶ」

三月廿三日　地には平和人には惠み

「それで、彼奴は何と云つた」

「何も申しませんでした、しかし私を見ると彼は私に復活祭の挨拶をしてそれから願ひはじめました。彼は新しいシヽヤツを着て耕しながら復活祭の讃歌を歌つてゐました。彼は畦の端で犁を返してはそれを振ひましたが蠟燭は消えませんでした。へえ、私が傍へ寄りますと、彼は犁から土くれを振ひ落した柄をまはしました。それで——彼が犁をまはして居る間蠟燭は矢はり燃えて居りました」

「君は彼奴に何て云つた」

「私は何も申しませんでした、併し他の百姓がそこへやつて來て彼を嘲笑ひました

「まあ御機嫌ようと彼等は云ひました」

「ミヘエコは苦難週間に耕作したから彼奴の罪は永く脱れることは出來ぬであらう」

「彼奴はそれに何て云つたな?」

「地には平和、人には惠み」とかう云つて彼は犁にもたれかゝつて馬に鞭をあて、矢張り低い聲で歌ひつゞけてゐました。その間始終蠟燭は燃えて居て消えませんでした」

支配人は今迄笑つて居たのをやめた。そして絃琴を側へ置き、胸に頭を垂れて、深く思ひ沈んだ。

三月廿四日　家　庭

自分は結婚してから、これで二週間になる。而して幸福にして、別個の、全然別個の人間になつた。此際どうして手紙など書いて居られやうか。先づいろんな眼に見えない様な心配や、眼に見える心配がある。其外自分は家政に沒頭しなけりやならない。そして、ソニヤも亦自分と同じやうにやつて居る。吾々は執事を雇はないで彼女自ら帳簿を整理したり金庫の出入れをして居る。自分には蜜蜂や羊もあれば、新しい庭園もあり、又酒精蒸溜所もある。

三月廿五日　無抵抗

如何なる害悪が、悪意が、汝の上にふりかゝつて來やうとも、それを忍べ。汝の有てる凡てを與へよ、たゞ抵抗するな、それより〻明瞭で精確で有理な何者があるか。私はたゞこれ等の言葉の簡單明瞭なる意味を握まなければならなかつたのである。

三月廿六日　基督教の眞髓

吾々凡ての者の知つて居た如く、耶蘇の教理の眞の意義は人を愛せよと云ふ教訓のうちに含まれて居るのを私は知つた。吾々が「他の頰を向けよ」「汝の敵を愛せよ」と云ふとき、吾々は基督教の眞髓を表白するのである。

三月廿七日　神祕の鍵

私は私の唇をもつて耶蘇を告白して居た。然るに私の心情は今も尙遙かに彼からか

け離れて居る。「惡に敵する勿れ」の誡めは耶蘇の教理の中心點である。それは單なる言葉上の肯定でない。それは人間の義務としてそれを實行しなければならぬ定則である。それは實に全神秘にまでの鍵である。しかし、其鍵は錠前の穴の奥底まで押し入れられねばならぬ。

三月廿八日　裁判

「惡に敵する勿れ」と耶蘇は云つた。裁判の唯一の目的は惡に敵する事である。耶蘇は惡に向つて善を報へせとすゝめたが、裁判は惡に惡を報へせと云ふのである。耶蘇は善をなすものと惡をなすものとの間に區別を置いてはならないと云つたが、裁判のするところは、それらのものより他の何物でもない。耶蘇は云つた、赦せ、たゞに一度や七度のみでなく無制限に赦せと。しかし裁判は赦さない、彼等は罪する。彼等は彼等の見てもつて社會の公敵となすものに善を報いない、惡を報ゆる。

三月廿九日　審きと救

「審かん爲にあらず、されど救はん爲なり」これが耶蘇の宣言である。何うして然らば救ふことの出來ない私が裁判官となり、そして刑罰を課することを得やう。

三月卅日　永生とは？

「僕は永遠にその家に住まざれど、子は永遠に住む」（約翰傳八・三五）と云ふことは神の意志を守る子は永遠の生命をもつと云ふことである。

さて生命の父（神）の意志は個人的利己的生活ではない。しかし人の子の子としての生活である。かくて人はその生命を一つの抵當として卽ち萬人の利益のために父から彼に托された或物として、人の子の生活を生活する何物かと思惟する時に、その生命を救ふ。

三月卅一日　今日の社會と教會的基督教

吾々の社會的結構の凡ては耶蘇が非難する主義の上に建てられて居る。吾々は彼の教理の簡單明白なる意義を了解しやうとはしない。そしてそれに拘らず、彼の教理に從つて居るのだと自分にも他人にも保證するか、さうでなかつたら、彼の教理が吾々に不便利だと云ふ。信者は三位一體の第二位にして神である基督が、彼の模範によつて如何に生くべきかを吾々に示さんが爲に地上に降つた事を揚言する。彼等は聖餐の施行のために華麗なる儀式を行ふ、寺を建て、宣教師を派遣し、儀式の擧行のため、また、教區の管理のため、祭司職を制定する。しかし一つの何でもないこと――耶蘇の教の實――を忘れて居る。

四月一日　組織的暴力

或者は律法をつくる。他の者はそれを施行する。ある者は自動的な服從をなす樣に訓練でもつて人を鍛える。そしてこれ等の最後のものがまた强制の機械となつて、何故に、もしくは何の目的でと云ふことを知らずしてその同類を殺す。しかし人をしてほんの一時でもこの復雜なる網細工から脱れしめよ、容易に彼はその强制が彼の本性に反して居るのを見るであらう。吾々が吾々自身の利益のために用ひて居るところの組織的暴力を肯定することを止めやうぢやないか。さうすれば吾々の暴力の教理と耶蘇の教理の何れが果してよく人間性と最もよく調和して居るかを明瞭に知ることを得やう。

四月二日　都會と田舍

姉が妹を訪ねて町から來た、姉は或る商人に嫁いで居たが妹は農夫の所へ嫁いで居た。二人の姉妹は茶を喫んで話をしてゐる中に、姉の方は自分の町での生活を大げさに自慢し出した――それは自分がどんな生活をしてゐるかと云ふこと、のんきに愉快に出て歩くと云ふこと、子供等には綺麗ななりをさせ、うまいものを食べたり飲んだりして居ると云ふこと、そして氷滑りや散歩や芝居に行くと云ふことであつた。

妹はそれを聞いて腹立たしく思つた。そしてその返報に、商人の妻の生活を貶して自分の田舍の生活をほめそやした。

「私の方から云へば姉さんの身分になつて見たいとは思はないよ」と彼女は云つた。「成程私達の生活は何一つ珍らしい事もない生活で、私達はこれぞといふ心をひくことは知らないでせう。けれど貴女は立派な生活をしてゐてもほんとに大きく商賣をやるか身代限りをしなければならないでせう、諺にもあるぢやないの『損は得の兄だ』つて。なるほど貴姉はきようはお金があるかも知れないが、明日はまちをうろつくかも知れないよ。私達はこんな田舍に居てもそれよりはもつとましな生活をしてゐる。百姓の生活は細かいかも知れないが、それや長いよ、つまり決して有福ぢやないけど何時も困るといふことはないわけさ」

四月三日　善と惡

火は火を消すことを得ず。

正義に向ふ人道の進歩は暴君によつてゞはない、殉教者によつてゞある。火は火を消すことを得ない如く、惡は惡を鎭壓することを得ない、惡に面接しその感染に抵抗する善のみが惡を征服することが出來る。人間の心靈の內部世界に於て此律法は絕對である。

四月四日　絕對の貞操

そして一度女と結ばれた以上は如何なる口實をもつてしても彼女を棄てゝはならぬ。何となればかくの如くにして棄てられたる女は他の男によつて求められ、かくて淫行がこの世に導き入れられるからである。

四月五日　現代生活と耶蘇の教理

吾々の生活は非常な困難をなめなければ耶蘇の教理の意味を了解し得ない程にも、それとは矛盾して居る。吾々は、彼が吾々に命じた人生の法則にも彼の說明にも、又く聲である——實に彼が吾々に殺してはならぬと命令するばかりではなく、怒りに對して警告する時も、惡に敵してはならない、他の頰を向けよ、敵を愛せよと命ずる時も。

四月六日　耶蘇の第一誡

馬太傳五章廿一節より廿六章に於いて私は耶蘇の第一の誡めを見出した。卽ち、凡ての人々と平和に住め、これである。如何なる事情に於ても怒が正當だと見てはならぬ。人間を價値なき者もしくは愚なる者として見てはならぬ。もし何人かゞ爾に向つて怒つたならば、たとひそれが理由なくしてゞあらうとも、凡ての敵意の減却され

んが爲めに和解せよ。爾に對して平ならざるそれ等のものと速に和解せよ。その怨恨をして爾の損失に終らしめざらんがために。

「地上に於ける神の國は、此の上に、卽ち凡ての人と互に平和であれと云ふ此ことの上に成立する。」

四月七日　困難と實行

吾々は曰ふ耶蘇の教理は立派であつても實行する事が出來ない、何となればそれは困難だからと。さてそれが困難なのは、それに從ふとき、吾々は吾々が今まで享樂して來たところの多くのものを奪はれなければならぬからである。吾々はかつて、一切の吾々の慾望を滿足さすよりも、困難や窮乏を忍ぶことは更に更に利であると云ふことを聞かなかつた。人は野獸の標準にまで陷るかも知れない、しかし彼はその獸性の辯護の爲にその理性を用ふべきでない。

四月八日　可能と不可能

もしも耶蘇の教理が完全に合理的であるといふことが許され、それのみが人間に眞の幸福を與へ得ると云ふことが許されるならば、それを少しも實行しない世界の眞只中では、その教理の誠實なる信徒の境遇が何うなるであらう、もし凡ての人が、同時にそれを守る事を決心するならば、その實行は可能になるであらう。しかし――一人のみが全世界に反して行ふことが出來ない。

四月九日　悔改

耶蘇の教理を了解するには、先づ第一に、吾々自身に歸らねばならぬ。嚴肅に反省し、耶蘇の先驅者たる洗禮者ヨハネが、判斷を暗まされて居る人々に向つて演說した時に語つたところの悔改めをしなければならぬ。

四月十日　死と永遠

如何なる事情があるにせよ、決して成就し得ないことに勞働くのは狂人のすることではないか。死は常に世間的繁榮の建柔が完成し終らないうちに來る。よし吾々がそれを前から知つて居たとしても、如何に死と闘つて見ても、勝つものは吾々でない、死である。吾々は死と闘ふべきでない。吾々の心情を確に滅び去るもの〻上に置かずして、その結果が吾々の避くべからざる離別（死）に逢つても滅されない仕事を成就せんことを求めよ。

四月十一日　哀なる不滅なるものを

若し耶蘇にして今日露西亞に住むで居たならば彼は曰ふであらう。「ベルデイチエーフ競技場若くはクウコウイエフの傾斜地に於て死んだそれ等の者共は他の者共よりも罪多かつたと汝等は思ふか。吾汝等に告げん、否。決してさうでない。若し汝等に

して悔改めずんば、自らを高揚せずんば、汝自身の中に不滅であるものを見出さずんば、汝等も亦同樣に滅びるであらう。汝等は塔によつて粉碎されたものや競技場に於て燒かれた者の死に戰慄させられる。しかし同樣に恐るべ　避くべからざる汝等の死が汝等の前に在る。汝等がそれを隱匿し忘却するのはよくない。見ないで過すに至つては更に更に恐ろしい事である。

四月十二日　愚なる哉

吾々はどんなに骨を折つて、吾々の榮養をとつても、吾々の肉體を大切にしても、その生命を一瞬の間たりとも延すことを得ない。吾々が成就し得ないところのことの爲に心を勞するのは愚なことではなからうか。吾々は吾々の物質的生活が死と共に終ることを知り拔いて居る。而も吾々自身は富を得んことに沒頭して居る。生命は吾々の所有するものによつて計り得ない。もしさう考へるならば、吾々は唯自分を欺くのである。耶蘇は吾々に告げる。人生の意義は吾々のもつて居るものや蓄積して居るも

の〻中にはない、と。

四月十三日　個人的欲求は死である

死はどの瞬間に於いても吾々を待つて居る、生は死のうちに隠れてしまふ。もし吾々にして吾々自身の爲めにのみ吾々の個人的未來の爲めにのみ働くならば、未來に於て吾々を待つて居るものは死であるのを吾々は知つて居る。そして死は吾々の勞働の果實を滅ぼしてしまふであらう。それ故に自己のための生活は何等の意義をも持つことを得ない。合理的な生活はそれと違つて居る。それは個人の單なる哀れなる願望とは違つた別の目的を持つて居る。合理的な生活は生が死によつて讓られない生活のうちに在る。

四月十四日　眞生命と神

人はみな、彼自身の生命即ち彼の個人的生命を救はうとすれば、耶蘇がかくも屢々

云つた樣に、眞の生命を失ふことを記憶せねばならぬ。眞の生命は過去の時代から蓄積せられた幸福の藏に何物かを加へ、現在に於て其遺産を增し加へ、そしてそれを未來に讓り渡すところの生命である。此眞生命を哺育せんがために、人は彼れの個人的意志を否定して眞の生命を與ふる神の意志をとらねばならぬ。

四月十五日　眞の生活

自我のみの爲に、動物的生命のために、生くのるは合理的でない。故に人々は、その存在の最初からして彼自身の欲求の滿足以外の生活に向つての何かの理由を求めた。彼等は子供の爲に住むだ。その家族のために、國民のために、人類のために、個人的生命と共に死なゝい一切のために。

四月十六日　一條の綱

溺れたる人が扶けを呼ぶ。一條の綱が彼に投げられる、そして彼は曰ふ「此綱が私

を救ふと云ふ信仰を強めよ。私はその綱が私を救ふことを信ずる。しかし私の不信を扶けよ」と。これは一體何と云ふ意味なのか。若しある人が彼の救ひの唯一の綱を摑まないならば、彼が彼の狀態を了解して居ないのだと云ふことが明かである。

四月十七日　信仰の動力

ヤコブは曰ふ。信仰の徵證はそれによつて靈動される行ひである。それ故に行を結果しない、信仰は人がそれによつて飢を充すことを得ず、信念を辨明することを得ず救濟を獲得することを得ない空なる言葉である。行爲のない信仰は信仰でない、それはたゞ何者かを信ぜんとする傾向である、人の實際に信じない何者かの信仰の空しき肯定である。信仰は使徒ヤコブが定義した樣に、行爲の動力である。そして行爲は信仰の顯現である。

四月十八日　信仰と判別

信仰の根柢は、吾々が人生より抽出すところの意義の上に存す。吾々が人生を主要にして善なるものと見るか、つまらない腐敗せるものと見るかを決定するところの意義その者に存する。信仰とは善惡の評價判別である。

四月十九日　信仰には報償はない

信仰をもつ爲には、報償の如何なる納束をも考慮に入れてはならない。破滅せる生活から解脫する唯一の道は主の意志に從ふことであると云ふことを吾々は了解しなければならぬ。

四月廿日　幻影

吾々の生存が他人との鬪爭によつて安全にされ得ると云ふ不滅なる確信のうちに幻

16490

影がある。吾々は吾々がそれを求むることによつて何を失ふかゞ解らない程、此の所謂生存並に財産の安全と云ふ幻影にならされて居る。吾々は一切を失ふのである。生命それ自身をすら。吾々の全生活は個人的安全のための心配と、生活の準備とでもつて充されて居る。かくして遂に眞の生活を生くることは決してない。

四月廿一日　誤れる人生觀

吾々は誤まれる人生觀をもつて居る。惡行の上に築き上げられ、利己的情念によつて皷吹された人生觀を。そして此誤まれる人生觀に於ける信仰を何等かの方法で耶蘇の教理にこぢつける。そしてそれを吾々の關與する最も重要にして最も必要なものだと思つて居る。もし人々にして幾世紀もの間、眞理でないものを信じて居なかつたならば、此誤まれる人生觀も、耶蘇の教えの眞理も、共に、ずつと前から明らかにされて居たであらうに。

四月廿二日　教會の眞理僭取

凡ての人々は、たゞに眞理なしに生くるのみならず、眞理を知らうとする微塵の欲求もなしに生くるのみならず、一切の無用な仕事の中でも最も無用な仕事は人生を支配する眞理を探求せんとする努力であると云ふ確信をもつて生きて居る。人生の法則は歐羅巴の社會を除いての他の一切の人民が常に最も重要なるものと思惟したところの教理は、耶蘇がそれを唯だ一つの必要なものと曰つた法則は、普遍的に輕蔑されたとひそれに屬して居る者でさへ、眞にこれを信じて居ない教會と云ふ制度が、長い間、此の法則の地位を僭取して居た。

四月廿三日　無抵抗の教

キリストの教は、復讐即ち惡に報いるに惡をもつてすることが、その惡を增大させる以上に、無益不合理だと云ふことを立證したに止まらない――それは更に、暴力に

よる邪悪に對する無抵抗、あらゆる種類の暴力に對して、暴力的に抵抗することなしに耐忍することこそ、人間に自然な眞實の自由の到達を成就する唯一の手段であるといふことをも證示した。この教はかう教へた。人が暴力に對する抵抗を試みるや否やかくする事によつて彼自身の自由を失はしめる。何故なれば、彼の側で他人に加へる暴力を許すことになれば、彼はそのために、同時に自分自身に對する暴力をも許し、從つて自分も抵抗する暴力によつて打克たれることが有り得るからである。さうしてよしや彼が勝利者となつて居るとしても、外的抵抗の範圍に踏み込むときには、彼はいつも將來、更に暴力によつて打克たれる危險が絶えない。

四月廿四日　不信者の云ひ分

耶蘇は眞理を教へた。若し形而上學的眞理が眞理ならば、それは實際に於てもさうでなければならぬ。若し神に在る生活が唯一の眞の生活であるならば、そしてそれ自

身有益であるならば、此地上に於いて、假令如何なることが起らうともそうでなければならぬ。若しこの地上に於て、彼の教理に合致する生活が有益でないならば、それは眞理であることが出來ないのだ。

四月廿五日　世の教理

吾々の大都市を通行せよ、そしてそこに見出されたる憔悴せる病身な、そして曲りくねつた人種を觀よ。汝自身の生存と、汝の親しく知つて居る一切の人民の生活とを想起せよ、汝の耳にした横死と自殺とを想起せよ。――而して後凡て此等の苦惱や死や自殺をなさしむるに至つた絶望やの起つた原因が何であるかを自らに問うて見よ。恐らく汝は、人間の一切の苦惱の十分の九は無用であり存在すべきでなく、實際に於て、大多數の人々は皆、世の教理の殉教者であつたといふことを見出して驚くであらう。

四月廿六日　聖地に入らなかつたけれど善をなした巡禮

日暮方此の家の主人は馬に乘つて家に歸つて來た。そして直ちに彼等に加はつてエリセイの身の上話を語り出した。「あの時あの人が來て下さらなかつたら」と彼は云つた「私等は一同罪の爲めに死んで了ふところでした。何故と云つて私達は死にかけ絶望に陷つて、彼處に横になつて居ながら、私等は神さまにも人にも不平を抱いてぶつ〳〵云つてゐたからでした。けれど此の信心深い巡禮さんは、私等を再び育て直して、私等を神樣におすがりすること、我々の同胞は善いものだと信ずる事を敎へて下さいました。何卒あの人に福祉のありますやうに。その前は私等はたゞ獸物と同樣に生きて居ました。私等を人間にして下さつたのは彼の人でした。

四月廿七日　革命の危險と基督敎

無思慮な亡國的な軍備と戰爭、土地に對する共有な權利を人民から剝奪すること、

私の考によれば、かういふものが、全キリスト敎國の上に差迫つて居る革命の原因である。

而も此革命は、ロシヤ以外の土地に於いては何處にも始まつてゐはしない。何故なれば何處の國とてロシヤ人民の間に於いて程にキリスト敎的人生觀が、かくまで力强く、かくまで純粹に保存されてゐたところがなく、又ロシヤに於て程に、大多數の人民の農業的生活狀態が今日まで存續されて來たところがないからである。

四月廿八日　暴力と幸福

時代から時代へと、人は、人々の暴力のうちにその生存の安定を見出さうとする。そして暴力によつてその特權を保護しやうとする。吾々の生活の幸福は權力と支配と世俗的物品の多量とにありと信ずる。吾々は此觀念にならされて居る。從つて人の幸福は幸運や力によらないと敎へ、富める者は神の國に入ることを得ないと敎へるところの耶蘇の敎訓によつて强要されるところの犧牲獸身に驚愕する。

四月廿九日　基督教徒となる資格

至るところで耶蘇は云つて居る。彼の十字架をとらないもの、世俗的利益を捨てないもの、「悪に敵する勿れ」の誡の一切の結果を忍ばうとしないものは、彼の弟子となり得ないと云ふことを。

彼の弟子達に向つて耶蘇は云つた。貧困を擇べ、悪に敵することなく凡ゆるものを忍べ、たとひそれがために自らを迫害や苦悩や死にまで至らしむるとも、と。

四月卅日　勞役

勞役に關しては、耶蘇の教理と世の教理との間に一つの相違がある。世の教理に從へば働かんと欲する事は人の非常な功績である、それ故に彼は他人と競爭をしてもいい、彼の勞役の量に從つて賃錢を要求することも出來る。耶蘇の教理に從へば、勞働

は人間生活の避くべからざる條件である。そして食物は勞働の必然の結實である。勞働は食物を産む、食物は勞働を産む。

五月一日　近づく革命

ロシヤ人民は、彼等の生活の特別な性質と狀態とによつて、キリスト教世界の他の國民に先立つて强壓的な國家の權力に服從することから出る災禍への意識に限覺めしめられた。さうして此の意識及び彼等の統治者の强壓から自身を解放しようと云ふ熱望のうちにこそ、私の意見では、たゞ單にロシヤ人民に對してのみならず、キリスト教の凡ゆる國民にとつて、次第に近づきつゝある革命の心髓があると思はれる。

五月二日　何れか

然らば何れがより、より合理的であるか。何れがより、より多くの歡喜となり多くの安全を與へるか。それは世の教理に從ふ生活であるか、それとも耶蘇の教理に從ふ生活であるか。

五月三日　世に降れる教會

教會は理論に於てイエスの教義を告白するが、實行に於ては否定する。教會は、其生活を指導する代りに耶蘇の形而上學的教理を下の如く說明する。卽ち生活の行動に關する何等の義務をもその中から引き出すのではなく、人々が今まで生活して來たのとは別な生活をする何等の必要をも引き出すと云ふのでもない樣な風に。世に對する愛着からして教會は世に降服したのだ。そしてたゞその勝利者の行列に從つて行くのだ。世はその欲するがまゝに振舞ふ。そして、人生の意義に關する說明を以つてその行爲を辯明する仕事を教會の手に任して行く。世は耶蘇の教理とは正反對の生活を構成する。そして教會は耶蘇の教理に反對な生活をして居る人間が、眞にその教理に從つて生活してゐるのだと論證しやうと努めて居る。

五月四日　世界平和の唯一の道

國家の擴大に對する唯一の辯解は、世界一統の大王國を形成してそれによつて戰爭の可能性を全くなくしてしまはうと云ふに在る。だがマケドニアのアレキサンドル、ロシヤ帝國、乃至ナポレオンによつて試みられた其の大王國形成の企圖は、一度として此の世界の平和と云ふ目的を達しなかつたのみか、反對に、諸國民にとつて最大の不幸の原因となつた。故に人類の平和と云ふことは、國家の增大と强盛とによつては恐らく到達され得ない。これは正反對の手段、即ち國家とその强壓的權力の廢滅によつてのみ到達され得る。

五月五日　革命の性質の相違と參加者の態度

現在人類の上に差迫つて來てゐる革命は、彼等を人間の權力に服事することの欺瞞から解放する點に在る。此の革命の本質が全くキリスト敎世界以前の革命と本質的に

相違して居る。その故に此の度の革命に參加する人々の活動も亦、以前の革命の參加者の活動とは全く相違しなければならぬ。

五月六日　依然として舊い形式の革命

今日のヨーロッパの革命の模型通りにロシヤを革命しようと努力しつゝある人々には、何等新しい基礎もなければ理想もない。彼等は單に舊い形式の强壓を、別の形式のそれに置換へようと努力するだけであるし、それは强壓によつて實現され、且つ、今日ロシヤ人民がそのために苦しまされて居るのと同じ不幸を伴つて居る。

五月七日　鷹と鷄

鷹は馴れて主人が呼べば何時でも彼の手に飛んで來るやうになつた。しかし鷄は主人を恐れて彼がその側に行くと鳴いた。

そこで鷹が鶏に言つた。

お前達鶏は恩に感じると云ふことがない。何と云ふ情けない奴だ。それで腹がすくと直ぐ主人の許へ行く、俺達野の鳥になると全く違ふよ。俺達は他のすべての鳥よりも強くて早く飛ぶ事が出來る。人間なんかは恐れはしない。しかし人間が吾々を呼ぶ時には自分からとんで行つて其の手にとまる。我々は人間が餌を與へて呉れたのを忘れない。

五月八日　不合理なる生活

土耳古人や獨逸人を殺しに行く事は合理的でない、愚なことである。汝及び汝の家族が流行の衣服を着んが爲に、又倦怠の根源である客室を保たんが爲に、他人の勞働を私用するのは不合理である。既に怠惰と墮落とによつて頽廢せる者を捕へて牢屋の中に投げ入れ、さうして斯くする事によつて、彼等を全くの怠惰と墮落との生活に入らしめることは不合理である。清澄なる大氣がつひ汝の眼の前にあるのに、都會の不

健康な空氣の中に住むのは不合理である――――凡てこれ等は不合理である。

五月九日　學ぶべき平和な生活

年寄りのゴリデイエイがまだ生きて居て、そしてイワンの父親が一家の采配を執つて居た間は、男達は隣り同志の善い手本になる樣に暮して居た。女達が飾や桶を要るか、男達が穀衣の要があつたり、車の輪を借りようとする時には、庭傳ひに遣り取りして、善き隣人の如く相互ひに間に合せた。牛の仔が穀打場に踏み込むで來ると彼等はそれを追ひ出して、たゞ「氣を附けて、また來ない樣にしてお呉れ、俺等あまだ穀物を仕舞はねえんだから」と云ふばかりであつた。そんなことはあつても穀打場や物置にあるものを隱ひ込んだり、錠を卸したり、或は喧嘩を仕出來すやうなそんなことは決して起らなかつた。

五月十日　融會

「小父さん！コサック！」かうオリエニンは聲をかけた。「こゝに這入り給へ！」

老人は窓を見て立つた。

「今晩は親友！」短く剃つた頭から帽子を上げながらかう云つた。

「今晩は親友！」オリエニンは續けた。「何だつて此小僧つ子達は君に怒鳴つて居るんだね！」

イエロシュカ小父さんは窓の處にやつて來た。

「彼奴等はわしの樣な老ぼれを揶揄ふんでさ。何でもありませんやね。わしは子供等が好きでしてな。此の老ぼれ小父さんを勝手に揶揄はしとけばいゝんでさ。」と、品格のある老人が喋るあのさつぱりした、響きのいゝ調子で云つて、「あんたは軍隊の司令官かね？え？」

「いや、僕は、見習士官だ。だが、その雉子は何處で捕つたんだね？」とオリエニン

が訊いた。

「森の中で雌を三羽射ちましたよ。」老人は窓の方へ廣い脊を向けながら答へた。彼のチエルケスカを血で汚して居る三羽の雉子は、首を帶に結びつけられて居た。

五月十一日　自然の愛

オリエニンも亦考へに耽つたが、つと立上つて階段を下りると、兩手を脊中にまわしながら、默つて庭を行つたり來たりし始めた。イエロシュカは急に瞑想から覺めて頭を擡げ、チラ〳〵とする蠟燭に誘はれてはその焰の中に陷つて行く蛾を、ぢつと見つめ出した。

「小馬鹿め！馬鹿め！」かう呟いた。「てめえは何處から飛んで來やがつたんだ？馬鹿！馬鹿！」と立ち上つて、大きな指で蛾を追ひ始めた。

「自分の身を燒いちもうぢやねえか、この小馬鹿め、さア此方に飛んで行きな、空間がたんとあるぢやねえか。」愛情の籠つた聲でさう云つて、ガサツな指で一匹の翅を

やさしく摑まへながら、それを逃げて行かせうとした。「我れと我身を滅ぼしてやがる可愛想になあ」

五月十二日　自惚の強い雄雛

二羽の雛が堆肥の上で喧嘩した。

一羽の雛が強くて他の雛を負かし堆肥から追拂つた。

どの牝鶏も勝つた雛の周圍に集まつてほめそやした。雛は彼の力と名譽とを隣の庭へ知らせたいと思つて、小舎の上に飛び上り、羽搏して高音に鳴いた。

「みんな私を見て下さい。私は勝つたのです。世界中でどの雛も私のやうな力を持つたことはありません」

雛が凱歌を上げるのを止めないで居ると鷲が彼を殺し、爪にかけて巣に持ち歸つた。

五月十三日　栗鼠と狼

栗鼠がちよこ〳〵と飛んで居たが誤つて眠つて居る狼の上に落ちた。狼は跳ね起きて彼を喰はうとした。しかし栗鼠は許して下さいと哀願した。

狼は云つた。

「よし許してはやる。が、その代り、お前は何故お前達はいつも幸福なのか話してくれるんだ。私はいつも鬱いで居る。しかしお前は戯れながら木を飛んで居るやうだ」

栗鼠は云つた。

「先づ私を放して下さい。その上でお話いたしませう。私は今あなたが恐ろしいのです」

狼は栗鼠を放免した。そこで栗鼠は木に飛上つてそこから云つた。

「あなた方は悪いからふさぐのです。悪行があなた方の心を溺ぼしたのです。私達はいゝから、誰に向つても悪いことをしないから幸福なのです。

五月十四日　資本主義と社會主義

今日自分は馬でキーリアの側を通つた。考へた。小額の資本では何の事業も不利である。資本の多いだけそれ丈け利益も多いし費えも少い。しかし斯う云ふからは決して、マルクスの云ふやうに、資本主義が社會主義を誘導するであらうと云ふ事にはならない。恐らくそれはそれを、然し乍ら權力を有するそれを、誘導するであらう。勞働發達は合同で働く事を強ひられるであらう。そして彼等は、より少く働いてその支拂はより多くなるであらう。だがそこには同樣の奴隷制度は存在するであらう。人々が自由に共通に働くのは、お互ひのために働くことを知るのは必要な事である。だが資本主義はそれを敎へない。それに反してそれは、彼等に憎惡と貧慾と利己心とを敎へる。故に、資本主義によつて、造られたる强制的な結合では、勞働者の物質的な狀態は改善されるが、然し彼等の滿足は決して確立されはしない。滿足はたゞ勞働者の自由な結合によつてのみ確立される。そして此のためには、如何にして結合し道德的

に自らを完成し、たとひ報酬を受けなくとも不滿なしに他人に喜んで仕ふべきを知る事が必要である。そしてこれは決して資本主義的な、競爭的な制度の下では學び得るものでなくして、それと類を異にするものゝ下に於てゞある。

五月十五日　よく生きたい

すると、もう自分は露西亞の貴族ではない、モスクワの上流階級の一員ではない、その友達でも親戚でもない、此等と同じ單なる蚋一匹に過ぎないのだ、自分の周圍の森の中に現はれる一羽の雉、一頭の鹿に過ぎないのだと云ふことが明瞭して來た「丁度彼等のやうに、丁度イエロシュカ小父さんのやうに、自分は、自分の小さい生涯を生きて、そして彼等のやうに死んでしまふのだ。彼が「其跡に草が生へるだけだ」と云つたのは本當だ――それで草だけだとしたら?」かう考へは走つて行つた。「それでも矢張り自分は生きねばならぬ、幸福でなければならぬ。何となれば自分は唯一の希望――幸福を持つて居るのだから、自分が何者であつたとて同じ事だ。他の皆の者

と同じく、その上に草が生へるばかりで何も殘らない筈だつたにしろ、全能の神樣の一部分が納れられる枠であつたにしろ、尙自分は出來る限り善い方法で生きなければならない。それならば幸福である子はどんな風に生きなければならないか。そして何故今まで幸福ではなかつたのか？」

五月十六日　他愛

そこで過去の生活を回顧したが、それは彼にとつて厭はしいものに思はれた。自分の眼に映じた自分は刻薄な利己主義であつた。何の要求も實際に持つてゐない時にさへさうであつた。そして絕えず輝く緣の葉や、沈み行く太陽や、澄んだ空等を凝視めて居た、そして自分の幸福が尙同じ地平線上に保たれてゐる事を悟つた。

「自分を幸福にするものは何であらうか？そして自分の過去の生涯の目的は何であつたか？」彼は自ら訊いた。「自分自身の利益の爲には、如何に刻薄であつたか、如何にムラ氣であつたか、そしてさうした行爲の結果は如何であつたか？——たゞ恥辱と

苦しみばかりである！してみると、自分が如何に少く見出すかと云ふ事が、幸福の眞髓なのだ。」

恁う思ふと、急に新らしい世界が自分に現はれて來たやうな氣がした。「これが幸福と云ふものなのだ。」から自分に云つた「幸福とは他人の爲に生きる事にあるのだ。これも亦明らかだ。人間には幸福に對する欲求が附與されて居る。從つてそれは正當であらねばならない。若し利己的に滿足しやうとすれば——即ちその努力を富や名聲や、肉體的快樂や、戀を獲ることに向けたならば——周圍の事情は此欲求を滿足させることを不可能たらしめてしまふかも解らないのだ。實際これ等の欲求は不合理のものだ。併し乍ら幸福に對する欲求は不合理ではない。如何なる欲求が常に外部の條件と離れて滿されるものだらうか？——愛、自己否定。」

五月十七日　書物

二人の男が一緒に、町の中で一冊の書物が落ちてゐるのを見付けた。そしてそれを

何方の所有にしたらいゝかといふことで口論をはじめた。

別の人が通りかゝつて訊いた。

「二人の中で何方が字を讀むのですか」

「二人とも讀めません」

「それなら何故本をほしがるのですか。お前達の喧嘩は、頭に髪の毛がないのに櫛を取るために爭つたと云ふ、二人の禿頭の男の話を思ひ起こさせます」

五月十八日　惡に敵する勿れ

「目にて目を償ひ、齒にて齒を償へ、と云へることあるは爾曹のきゝし所なり。されど我れ爾曹に告げん、爾曹惡に敵する勿れ」（馬太傳五・三八―三九）

これ等の言葉は恰も私が以前決して讀んだことがなかつたかのやうに突如として私の前に現はれた。以前は常に此節を讀んでも、私はただ、容易に「されど我爾曹に告げん、爾曹惡に敵する勿れ」を見のがして居た。私は常に丁度今私の引用した言葉が

決して存在しなかつたか、もしくば、何等決定的な意味をもつて居なかつたやうに見えた。

五月十九日　自然と一つ

彼は自分が毎日々々益々自由に、益々人間になつて行くのを見出した、コウカサスは彼の夢想とは全然異つて居た。彼は自分の幻や又はコウカサスに就いて聞いたり讀んだりした話に似通つてゐる所は絶對にないと云ふ事を見出した。

「こゝには自分の想像して居たやうな軍馬もなければ瀑布もない。アマラット・ベックも居なければ豪傑も居なければ、漂浪者も居ない。」と考へた。「人々は自然にならつて生活して居る。彼等は死ぬ、生れる、結婚する。又生れる、戰ふ、飲む、食ふ、歡樂を盡す、そして又死んで行く。大陽や草や獸や樹木の上に自然みづからが與へた不變の條件の外には、何等の條件もない。外の法則に服從する事は無い」

その結果として、此等の人達は自分に較べて美しく、強く、且つ自由に思はれた。

だから彼等を見ると、自分が何となく恥しく悲しくなつた。

五月二十日　惡に敵する勿れ

「惡に敵する勿れ」彼等が爾の右の頰を打ち、そして何等の抵抗を爾から受けないとき、彼等はまた爾の他の頰を打つべきを知つて居ようとも、汝の上衣をとつた者は更に外套をも取るべきを知つて居ようとも、汝の勞力を利用したものは更に多くの勞働を何等の報酬なくして汝に強ひるであらうことを知つて居ようとも、凡てこれ等のことが汝に起らうとも「惡に敵してはならない」汝を害するものに善をなせ。これ等の言葉をその字義どほりに了解したとき、かつて不明であつた凡ては私には明瞭になつた。そしてかつては誇張の文字と見えたものも、今は極めて有理なことに見えた。初めて私は「惡に敵する勿れ」と云ふ中樞的觀念を握むことが出來た。

五月廿一日　過ぎゆく青春よ

「デイデイーリ」歌や、それに似た歌で彼が且那方の歌と云つて居るものを、たゞオリエニンのためにのみ唄つた。けれども後になつて、更に三杯の酒を引掛けると彼は昔時の事を想ひ出し、ほんたうのコサツクや韃靼人の歌の見本を唄つた。其中でも取りわけ好きな歌を唄つて居る途中で彼の聲が突然破れて、バラライカの糸を搔き鳴し續け乍ら杜絶えてしまつた。

「おゝ、お前樣！」と彼は叫んだ。

波の聲の變つた響が、オリエニンの注意を惹いた。老人は泣いて居た。涙が眼にたまつて一滴が頰を傳つて流れ下つて居た。

「おゝ、若い時よ、お前は又と歸つては來ねえだな。」から叫んで咽び泣いたが、やがて止めてしまつた。「飲まうよ！何だつてお前樣飲まねえだ！」と、突然涙を拭きもせずに、打ちふるへる聲で云つた。

五月廿二日　和解

「子供達、お前等は馬鹿なことをして居る。何も彼ももとの起りほほんのツマラない馬鹿さからだ。まア考へても見ろよ、この總ての面倒の起りはといへば鷄卵一つぢやないか！その小さな卵を子供等が拾つたと考へて見ろよ。いゝぢやないか拾つたつて。卵一つ位タイしたもんぢやない。神様はみんなの爲に澤山に持つてお出なさる。ナニ一言位ゐ先方から悪口を云つたとしても、お前はそれを直して遣りやいゝや、先方にもつと善いことを云ふやうに、教へてやりやいゝぢやないか。お前達は撲り會ひをしたつて――私達はみんな罪人だ！こんなことになるなんて。さア、行つて仲直りをして來い、そうすればみんな忘れちもうわ。が腹立ち紛れに振舞ふと。物事がお前に取つて段々悪くなる一方だぜ。」

五月廿三日　無抵抗の實行

「されど、人、爾の右の頰を打たばまたほかの頰をも轉らせてこれに向けよ」（馬太傳五・三九）――これ等の言葉は常に人間の性質に反して忍耐と克己とを要求するものゝやうに私には見えた。之等は私を感動させた。これに從ふことは高貴なことだと私は感じた。しかし私はまたそれを實行する力のないことをも感じた。私は私自身に云つた「もし他の頰を向ければ、又打たれるだらう。もし與へれば自分の持つてゐるものを全部とられるだらう。かくては生活が出來ない。生命を自分に與へられて居る限り、何うして私は、それを自ら奪ひとることが出來るか、耶蘇はそんなにも多くを私に要求することが出來ない」かくの如く私は、理窟をつけた。そして耶蘇が忍耐や克己を推奬したのは明瞭と精確とを缺ける誇張せる言葉を用ひたに過ぎないのだと思ひなした。しかし「悪に敵する勿れ」と云ふ言葉を了解した時、私は耶蘇が誇張したのではないと云ふことを、彼が苦惱のための苦惱を要求したのでなく、非常に明瞭なそ

して精確な言葉をもつて、彼の言はんと欲することを的確に明言したのだと云ふことを知つた。

五月廿四日　非難

デイ・ロストウスキイの聖徒傳の中に、常に私を非常に感動せしめた短い物語がある。それは或る一人の修道僧の話で、その修道僧は、人々の知れる限りに於ては多くの過失をもつて居たのにもかゝはらず、聖徒達の間に於いて名譽ある地位を占めて居るのを、他の一人の修道僧が夢に見た。彼は驚いて「何うして此の坊さんは、あゝも我儘であつたのに、こんなに大きな報いを得ることが出來るのですか」と訊ねた。するとその答へはかうであつた。「彼は決して何人をも非難しなかつた」

五月廿五日　自然その者

私の次の回想は私の五歳か六歳の時のことであるが、これにはさう澤山ない、ことに戸外の生活に關したことでは一つもない。五歳の時になつても、自然は私には存在せぬものであつた、私の記憶えて居る凡ては寢床の上や室内におこつたことである。草も葉も空も太陽も私には存在しなかつた。何んな草をも見た事がなく、誰も太陽から私を遮つたものがなく、誰も私にそれをもつて遊ぶ樣に花や葉を與へたことがないなど〻云ふことは有り得ない筈だが、それでもなほ私が五歳か六歳になる時まで、自然とよぶものに就いての回想を私はもたない。恐らくそれを見んがためには人はそれから別たれなければならぬのだらう。そして私が即ち自然であつたのである。

五月廿六日　體罰

私達子供等は吾々の家庭教師と共に散歩から歸つて居た。小屋の近くまでやつて來

た時私達はまる〳〵と太つて居る番頭のアンドリユウに會つた。彼は「斜視のクウズマ」と稱ばれて居る馭者の助手をづれて居たが、その馭者は悲しさうな顏をして居た。彼は妻持でもう若くはなかつた。私達の一人が彼に何處へ行くかと訊いた。すると彼はクーズマを罰するために小屋に行くのだと落ちつきはらつて答へた。私はこれらの言葉及び此のお人好しの元氣のないクウズマが私に起させた恐ろしい感情を記すことが出來ない。

夕方私はこれをタティアーナ小母に告げた。

彼女は體刑を非常に嫌つて、彼女の力の及ぶ範圍に於いては農奴に向つても私達に向つても同樣にそれを許さなかつた。彼女は私の話したことをきいて非常に氣嫌をわるくした。そして斯う云つて私を咎めた。「なぜお前はそれを止めなかつたのか」と。彼女の言葉は一層私を悲しませた。……私はちつとも私達がそんな事柄に干渉し得るとは思つて居なかつた。だが今はそれが出來る樣に思はれて來た。しかしそれはもう遲かつた。そして此の恐るべき事がなされて居たのである。

五月廿七日　感化

タティアーナ小母は私の生涯の上に最大の感化を與へた。私の幼少の時分から彼女は私に愛の靈的歡喜を敎へた。彼女の全生活によつて彼女は愛をもつて私をみたした。私は如何に彼女が愛を享樂して居るかを見た。また感じた。私は愛の歡喜を了解した。これが第一のことであつた。

次に彼女はまた私に急がない靜かな生活の喜びを敎へた。

五月廿八日　喧嘩

「イヴン、この廣い世界はお前たちの爲に自由に出たり這入つたりする爲に開かれて居る、それに俺はこの幾年の間、爐の上に寢たきりで居るからといふて、お前は、お前達には何でも見えるが、俺には何にも見えないとでも思つて居るのか？左樣ぢやないよ、若い者よ、お前には何一つ見えない、憤怒がお前の眼を昏ましとる。他人の惡

いことはお前の前にあるけれども、お前自身の惡いことはお前の脊後にあるのぢや。お前は彼が惡いことをしたと云ふ。惡いことをするのが彼一人に限られてをるなら、この世の中に惡いことはない筈ぢや。一人の男が惡いばかりで世間に惡事と云ふものが起ると思ふか？喧嘩をするにや二人居なきやならぬ。お前には彼の罪は見えるけれどもお前自身の罪は見えない。

五月廿九日　善い隣

俺はそんな風には生きなかつたぜ、兄弟よ、俺はさうしろとはお前に教へなかつた。あの男の父親の老人や俺がむかし生活して居た有樣は、そんな風であつたと思ふか？俺達はどんな風に暮して居たと思ふ？善い隣り同士らしかつた。隣りに麥粉が品切れになれば嗅が來る――「フロルの小父さん、私のとこぢや麥粉を切らしました。」――「ぢや納屋に入つて要るだけ取つて行くさ。」隣家には馬を使ふものが一人も居なかつた。――「おい、ワンヤトカ（イワン）、行つて隣家の馬の世話をして

來い。」そこで、何でも俺の方に間に合はないものがあれば、隣家に行く、――「ゴーデイエイの小父さん、俺やこれ〳〵のものが要ります。」――「持つて行くさ、フロルの小父さん！」と、何でも俺達はそんな風に暮して來たもんぢや。

五月卅日　現代文明の特徴

有るものは宗教上の虚僞、それも一つぱいりでなく樣々な虚僞が幾つとなく相鬪つて居る。有るものは科學上の虚僞、こゝにも亦無數の虚僞が混亂してゐる。有るものは政治上の虚僞、國際上の虚僞、黨派の上の虚僞、藝術の虚僞、傳統と慣習の虚僞實に有りと有らゆる虚僞が跋扈してゐる。而して宗教的世界觀から流れ出た生活の指導といふものは見付けたくもないのである。そして基督教社會の人々は單に個人的利慾と生存競爭の爲めにその生命を縛られて、動物のやうに生きて行くだけである。異る所はたゞ動物は測り知れない昔から胃袋も爪も角も其の儘に保つて來たけれど、人々は歩道から鐵道、馬から蒸汽、口傳から書籍、電信電話、帆前船から汽船、冷たい

武器から火藥大砲爆彈飛行機と追々訊速に回轉して行く點にある。

然し此の電信電話、電燈爆彈飛行機を得た人生は他の一面に於て萬民相互の仇怨を增し人々を統一する或る宗教的原理に從はないばかりか、却つて人々を乖離せしむる動物的本能を讃美し、その滿足を助長する智的育力を振廻して居る。——此の樣にして人生は漸く無智の闇と悲痛の淵に沈んで行くのである。

五月卅一日　理想郷

そして王は問うた。

「では話して呉れ、お祖父さんよ、お前はそれを何處かで買つて來たのか、でなければおまへはそれを全く自分で作つたのか？」

老人は微笑した。

「私の時分には、」彼は答へた、「だれもパンを買つたり賣つたりするなぞと云ふ罪深いことは思ひもよりませんでした。そして私どもはお金と云ふものなどは知りませ

んでした。人は各々自分の穀物を充分にもつて居ました。

「それでは話してくれ、お祖父さんよ、」王は問うた。「おまへの畑は何處にあつたか、何處でお前はこのやうな穀物を作つたか？」

「私の畑は神樣の土でございました。何處でも私の耕すところが私の畑でございました。土地は自由でした。土地は何人もそれを自分のものだと言はないものでございました。勞働だけは人がそれを自分のものと呼んだものでございます。」

六月一日　女の人生觀

一人の母はその娘を料理店に送り、他の母はこれを朝廷や舞踏會に送るのである。併しこの二人の母によつて抱かれて居る世界觀は全く同じである。即ち女は男の淫慾を滿足せしめねばならぬ。そしてその故に彼女は養はれ着物をつくつてもらひ、大事にさるべきであると云ふ想念である。

然らば、如何にして吾々の貴婦人達はこの女やその娘を救ひ得やうぞ。

六月二日　救濟の困難

もし私が、彼を洞窟の中から救ひ出して來て、立派なところにつれて來て置くならば彼は其處に存在して居る人生觀に同化しないで居るわけに行かない。そして之等の人生觀に從つて彼は、人生は尊敬すべき地位に在りては、働くことなくして住みよく食ひよく飲み、そして快暢なる生活を送らねばならぬのだ。と了解する。

六月三日　都會貧民

彼等は馬車を製造し玩具や着物を作る。そして次第〳〵にその富める隣人から、如何にして彼等の如く生活するかを――即ち眞の勞働によらず、凡ゆる種類の詭計によつて、他人の集めて居る金を絞り取る樣な――學び、かくて墮落と破滅とに至るのである。然らば、都會の富者によつて墮落させられた之等の人民こそ、私が嘗て救はんとして救ふ事の出來なかつた都會貧民を構成するところのものである。

六月四日　父の愛と神の愛

父はその子がまさに永の旅路につかんとする時、彼に道草をせよとは命じない。また露宿せよとも飢もじい目にあへとも風雨に晒されよとも云はない。

彼は曰ふ。「さあ出かけろ、そしてぬれた寒い目をしてはいけないがしかし途でぐづ〳〵してはいけない」と。

同じやうに耶蘇も亦「他の頰を向けて苦しみを受けよ」とは云はない。しかし彼は曰ふ「悪に敵するな何事が起つても抵抗するな」と。

六月五日　そんなものではない

人々の宗教はかうである。神がある。又神々や聖者達がある（一百姓が私に語つたところによると、基督は人々に、如何にして、又、誰に祈るべきかを教へるために地上に降臨したのだと）神々や聖者達は奇蹟を行ひ、肉體の上に及ぼす力を持つて居て英雄的な行爲や善業をする。而して、人々はたゞ祈りさえすれば、どうして又、誰に向つて祈るべきかを知りさへすれば、それでいゝのだ。だが人々は善行をする事が出來ない。彼等はたゞ祈るばかりである。此處に彼等の全信仰がある。

六月六日　親密になれないのは

私は彼と親密になりたいと思ふ。そして彼の誠實でないことを呟く。けれど私は、

虱がうつツたり、何かの傳染病をうけるのではないかしらと心配して、彼の寢床に座ることが出來ない、また彼等をして、私の室に入らしめる事をも恐れる。――運よくば入口の室で、併し屢々冷たい玄關で。而も私は、私が彼と親密になれないのは彼の過ちであると云ひ、彼が誠實でないからなど云ふのだ。

六月七日　世人の宗教觀

斯く人々は宗教を見るのに、それが吾々の内的經驗によつて知られたるものとはしないで、外的な現象とする。云はゞ、それはある人々にとツついた、そして唯その外的な徴候によつてのみ診察することの出來る病氣の樣なものだとするのである。

六月八日　私の富

そして實際、私の金とは何であるか。何うしてそれを手に入れたか。一部分は父から譲り受けた土地から地代の形で集められたのである。百姓はその地代を私に拂はんが爲めに彼の最後の羊や牡牛を賣つたのである。

私の金の他の部分は私の書いた書物の代價として受取つたのである。若しも私の書物が有害であつて而も賣れるならばそれによつて得たる私の金は不正に儲けた金である。併し私の書物が有用であるとするならば事は益々惡るくなる。私はそれを彼等に與へないで、却つて云ふ。「澤山の金をよこせ、そしたら賣つてやるから」と。

六月九日　施與と慇懃

もしもある人が光を君に乞うたとする。そしてもし君がそれをもつて居るならばマッチに火を點じてやらねばならぬ。若しもある人が君に三コペックか十コペックもし

くは數ルーブルを乞うたとするもしも君がもつて居るならばそれを與へねばならぬ。それは慇懃の問題である。慈善ではない。

六月十日　恥

私が羞恥を感じたのは別に不思議ではない。併し善をなし始める前に、私は惡を捨てねばならぬ。そして私自身をして、貧民をつくることのない境遇に置かねばならない。併し私の生き方は凡ていけない、もし私が十萬の金を與へたとしても私はまだ善を行ふ境界には自分を置かないのである。何故ならば私はまだ五十萬を殘して居るから。

六月十一日　魔法の金

私はこの種の人々、即ち種々の計略の手段で勞働者からその生活の必需品を奪ひ取つて、それが恰かも勞働者等のためにであるかの如くに見せかけた。而も私は却つて

之等の不幸なる人々を誘惑するところの盡きざる魔法の金を創造するところの人々の階級に屬するものである。

六月十二日　美と愛

藝術についての非常に重大なこと、美とは何であるか。美とは我等の愛するところのものである「彼は美しいから愛らしいのでない。愛らしいから美しいのである」此處に問題がある。何故愛らしいのであるか。何故我等は愛するのであるか。そして我等が、或るものが美しいから愛すると云ふのは、恰も、空氣が快いからだと云ふのと同じである。我等が空氣が快いと知るには呼吸しなければならないからである。そして同樣に我等が美を見出すのは我等が愛しなければならぬからである。そして精神的の美を見る力を持たないものは、少くとも肉體的な美を見て、それを愛する。

六月十三日　魔法の金の所有者

私は人々を扶けんことを欲する。だからそれ故に先づ第一に一方、我が今なして居る風に彼等のものを掠奪することを止めねばならず、他方また彼等を誘惑することを止めねばならぬと云ふことは明白である。然るに私は、幾世紀の間も行はれた、かの最も複雜な、狡猾な、そして邪惡な計略の手段によつて、私自身をこの所謂魔法の金の所有者とした。卽ち、私自身では何事もしないのに、幾百千人の人をして私の爲に働かざるを得ざらしめる樣な、そして實際に於て、この獨占的な特權を私有して居る樣な境遇に陷つたのである。

六月十四日　先づ奪はざれ

慥にこれは明かである。もしも私が貧しい者を扶けたいならば、卽ち貧民をして貧民たらしめない樣にするのには、私は先づ之等の貧民を創つてはならないのである。

而も私は、脱線した人々に自分の想像のまゝに金を與へ、そして、まだ脱線しないものから十ルーブルを奪ひ、かくして彼等を貧しくし、同時に又墮落せしむるのである

六月十五日　金の暴力

若しも、この虚偽の所謂經濟學なる者が他の法律科學と同じで――即ち暴力の辯明で――なかつたならば、それはまさしく、富の分配や、人々から土地や資本を奪ふことや、及び、ある人々が他の人々の勞力を利用するのは、換言すれば奴隷とするのはたゞ金の爲であると云ふことを見遁すわけに行かない筈である。

六月十六日　奴隷制

凡ての奴隷制は專らこの事實、――即ち一人の人が他の人の生命を奪ふことが出來又さうすると云つて威嚇することによつて彼の意志を强制的に行はしむる事の上に築かれる。

六月十七日　武裝者の暴力

武裝せる人間が武裝しない人間に云ふのである。「余は爾の兄弟を殺した樣に（爾が目擊せるが如く）爾を殺す事が出來る。併し余はさうしたくない。余は爾を救す――第一に先づ、爾を殺すことは余にとつて愉快でない。第二には、余にとつても爾にとつても、余が爾を殺すよりも、爾が余の爲に勞働する方がより便宜だからである。それ故に余の爾に命ずることは凡てなせ、併し知つておくがいゝ、もし爾にしてそれを拒むなら、余は爾の生命を奪ふであらうと云ふことを。」と。

六月十八日　眞の奴隷制

奴隷制は夙に廢止されて居る。それは羅馬に於ても、亞米利加に於ても露西亞に於ても廢止されて居る。併し實を云ふと廢止されたのはほんの言葉ばかりである――害惡そのものではない。奴隷制とはある人々をして、その缺乏を滿足さすのに必要なる

勞働から脱れしむる暴力的解放である。人々から他の人々にまでの勞働の移植である。而してまた、他人が自意的に且つ好意的に働いて呉れるのではなく、たゞ自分が働かなくとも他人をして自分の爲に働かしむることが出來るところから、自分で働かない人の存するところに常に存在するものである。

六月十九日　金と奴隷制

「他人を殺すべき、承認されたる權利をもつ一人の武裝せる人間が存して居る限り、それが誰であらうと――富の不正な分配即ち他の言葉で云へば奴隷制が存在する。

「常に存在した如く、奴隷所有者と奴隷との存する限り、人は金が勞力を代表するとは斷言することが出來ない。」

「金が勞力の代表でなく、最も多くの場合それが暴虐の代表である。もしくは特に暴虐の上に築きあげられたる複雜なる詭計に過ぎないと云ふことを私は經驗によつて確信する樣になつた。

六月二十日　わが軛は輕し

耶蘇は決してかゝる不可能を認めなかつた。

だから彼れはこれに從はぬものは神の國に入ることを得ないと明白に宣言した。如何なるところに於ても彼は服從が困難だとは云はなかつた。否、それとは反對に、かくも多くの言葉でもつて云つた。「わが軛はやすくわが荷は輕し」（馬太傳十一、三十）福音記者も云つた「彼の誡は難からず（約翰一書五・三）神が彼の律法の實行し易さを宣言し、そして自ら人の貌に於て實行し彼の弟子達もまたこれを實行した。何うして私が超自然力の助けなしに服從し得ないと敎え又云ひ得よう。

六月廿一日　神と共に在り

昨夜眠らなかつた。胸が絶え間なしに痛む。苦しみ續けてゐるが尙、自己を神に捧げ切るのが出來ないで居る。自分は傲心と謀反とを統御しては居ない。で心の痛み止

まない、一つの事が自分を慰めてくれる。それは自分は獨りでなく神と共に在る、故に如何に苦痛が惡しからうと、なほ自分は、何事かゞ自分の裏に生じつゝあることを感ずる。「父よ」我を助け給へ。

六月廿二日　百姓と彼の馬

兵隊達は敵地に侵入した。一人の百姓が野にかけ出て、放つてゐた馬を捉へようとした。

併し馬は百姓の許へ來たがらなかつた。

そこで百姓は馬に云つた。

「馬鹿奴、若しお前が私に捉へさせないなら敵がお前を伴れて行くぞ」

馬は訊ねた。

「その敵は私を何うするでせうか」

百姓は答へた。

「無論お前に重い荷を負はすよ」

そこで馬は答へた。

「ヘン、私はあなたのために重荷を運びませんでしたか。だから貴方のために働らくのも、あなたの敵のために働らくのも私にとつては同じ事です。」

六月廿三日　耶蘇の復活

耶蘇自身の復活に關する豫言として註解されて居る節のうちに鯨の復中に葬られたヨナの事と宮の再建に關する二つの引照がある。今一つは人の子は滅ぼされないだらうことを斷言した。しかしそこには耶蘇の復活に關する一言もない。原本では此等のどの節にも「復活」は見出されない。

六月廿四日　新しい奴隷

金は新らしい恐ろしい奴隷制である。そして人身的奴隷制の舊形式の様に、それは奴隷をも其所有者をも堕落さす。たゞそれよりももつと悪るい事は奴隷及びその所有者の何れをも人格的な人類關係から開放することである。

六月廿五日　慈善の本性

私が貧民を救はうとしたのはたゞ單に貯蓄すべき金をもつて居たからである。それに加へて、金は勢力を代表し、且つ概して云ふと、金はそれ自身として合法的なものであり善であると云ふ一般の迷信を分有して居たからである。然しこの金を與へはじめて、初めて私は、それは私が貧民から蒐めた爲換手形を振り出して居るのに過ぎないのだと云ふことを知つた。昔の地主がその或る農奴をして他の農奴の代りに働かざるを得ざらしめたのと全く同じことをなして居るのを知つた。

六月廿六日　簡單なる結論

私は次の簡單なる結論に達した。即ち人々の苦惱と墮落とを惹起さない様にするには、彼等をして私の爲めに出來るだけ少しく働かしめ、私自身をして出來るだけ多く働かしむべきであると。

六月廿七日　愧ぢよ

舞踏會は非常に樂しく行はれる。さうかも知れない。併し如何にしてそんなになるのか。もし吾々にして、社會もしくは吾々自身の間に於いて、飢ゑ且つ慄へて居る者のあるを見る時、吾々は自ら樂しむことを愧ぢる、そして彼等の養はれるに至るまでは樂しみ初め得ない。吾々が、他人を惱ます事によつて自ら享樂し能ふ人民の存することを想像し得ないと云ふことは云ふまでもない。

六月廿八日　雇人と主人

私は清潔を好む。そして、私は一日に二度とりかへる私の襯衣を洗ふと云ふ條件の下に私の洗濯女に金をやる。そしてこれ等のシヤツ衣を洗ふことは洗濯女のありつたけの力を要したので、彼女は遂に死んだ。

何の惡がこの中に在るか。

六月廿九日　生産と勞力

何處に、また、如何に、人が住まうとも、彼の頭の上の屋根は自ら生じはしない。この煖爐の薪は自分でそこにやつて來はしない。水力もまた自分でやつては來ない。そして燒かれたパンは天から降ては來ない。彼の食物、彼の被服、そして彼の足の被ひもの、凡てこれらはたゞに夙くに死んだ過去の人々によつてつくられたばかりでなく現に幾百千の、自らのため、また子供のため、十分なる隱家と食物と衣服とを自分

及びその子供たちを、苦惱夫折から救ふ手段を得んとする無駄な努力のために、衰頽し死亡しつゝある人々によつて造られて居るのである。

六月卅日　有用の徵證

ある人の他の人に向つてする活動の有用を徵證するものはたつた二つある（一）外的徵證――それが行ひかけられた人々によつてその有用を認容された場合。（二）內的徵證――有用ならんと試みて居る人の活動根柢に、他人に有用ならんと欲する欲望が横はつてる場合。

七月一日　起源なる神

私は母から生れた、母は祖母から生れた。祖母は大祖母から生れた、だがそも〳〵最初は――誰からか、かくて私は必然的に神に到着する。

私の脚は私ではない。私の願は私ではない。私の感情は私ではない。私の思想さへ私ではない。然らば、私は何であるか、私は私である。私は私の靈魂である。

何れの側から私が神に近寄ろうとも、何時も同様であらう。私の思想の起源、私の理想の起源は神である、私の愛の起源も亦神である。物質の起源も亦神である。

七月二日　新宗教

神及び信仰に就けるある爭論は、自分の生涯を捧げ得ると感ずる大きなすばらしい想ひにまで自分をつれて行つた。その想ひとは人類の進歩に適應した新宗教、即ち獨斷や神秘をとり去つた基督の宗教、未來の祝福を約束するのでなく、この地上に於て

幸福を與へるところの實際的宗教の樹立と云ふことだ。この想ひは勿論、その目的に向つて働らく幾代の人々によつてのみ達せられるのを知る。ある時代は次の時代にまで此の想ひを傳へ遺す。そして何日か、狂熱か理性かの何れかによつて實現される。宗教をもて人類を結合する爲めに、自覺的に働く事が――それが自分を靈感せしむるならんことを願ふ――自分の想の根柢である。

七月三日　自然と人

山が、山が、山が、彼の思想や感情をすつかり取りこんで居た。

「犬にキスしやがつた！徳利を甜めやがつた！イエロシュカ小父さんは犬にキスしやがつた！」窓の下に獨樂を押し込みながら、急に子供はかう叫んで、町角の方へ駈けて行つた。

「犬にキスしやがつた！。お酒と劍と交換つこしやがつた！」と、腕白共は一緒に集まつて駈けずり廻りながら囃し立てた。

この叫び聲はイエーロシュカ小父さんに向けられたものである。イエーロシュカ小父さんは肩に鐵砲をかけ、帶に雉の集をぶら下げながら歸つて來たところであつた。

「俺がわるいんだよ。子供達！俺がわるいんだよ！」腹を立てゝ居るらしいが、併しそんな事はどつちだつて同じ事だと云ふ風を裝ひながら、かう繰り返した。

七月四日　遲起き

一八五一年七月四日

相變らず空虛は恒に感じて居るが、他の事に就いては別に不滿がない。唯何等の感想も起らない。一寸した思ひ付きは思ひ浮ばぬでもないが、それは餘りに無意義過ぎて到底記錄して置く氣になれない。それが何故かは自分にも解らぬ。批評眼の進んだ爲めか、それとも創造力の鈍つた爲めか？

何と云ふ詰らぬ暮し方をしたものだらう！今日の如きは何一つの思ひ出すべき事もして居ない、何一つ印象に殘つたものも無い！懶な氣持をし乍ら遲く起きた。遲く起

きると予は必ず恁う云ふ不快な氣持におそはれる。惡い事をして寢過ごしたと思ふ時は既に遲い。罪を犯して主人の前に曳き出された犬の如く、一種異樣な不快を感じない譯にはゆかなかつた。

斯くて予は早起きの人の感じる快い氣持を考へて見た、而して予も亦何故いつでも左樣いふ氣持になつて居られぬかと云ふ事を怪しんだ。

七月五日　青春

世の中には此力を缺いてゐる人々が實際にゐる。さう云ふ人々は生活に這入ると、最初に身に著けられた馬具をそのまゝ受けて、最後の日までそれを著けたまゝで眞面目に働いてゐる。けれどもオリエニンは青年のこの萬能力、一つの慾望一つの思想を專念し得る能力、意欲したり、實行したり、何故か、何の爲かなどと考へてゐずに底なき深淵に眞逆樣に飛込むで行つたりし得る能力のあらはれを、餘りに力强く自分の中に意識してゐた。

彼は此の意識を心から離した事がなく、それを誇り、それによつて幸福にされて居た。これまで彼の愛情の唯一の對照は自分自身であつた。そしてそれは又は避け難い事であつた。何故なら、彼は善に非ざる何物をも自身から期待した事がなく、未だ嘗て自分に對する幻を失つた事がなかつたから。

今やモスクワを去らむとするに及むで、彼は丁度青年が今までして來た自分の過失を認めて、急に、自分が正しい軌道を通つて來なかつた事、今までの自分の行爲は總て不正で無意味だつた事、これまで正しく生きやうとする慾望さへもつて居なかつたこと——併し今昔の幽靈を捨てゝしまつたので、新らしい生活が開けかゝつて居る。自分は其生活においては、昔の過失、昔の悔恨を避けやうと思ふ。そして必ず〳〵幸福の外何物をも見つけまいと思ふ。と云ふ事を告白するやうな、あの若々しい幸福な心持になつてゐた。

七月六日　田園生活

「所で、これが俺達の酒ぢや！え〻？」と農夫は目をしばたゝきながら云つた。實際レブインは、草の葉がフワ〳〵浮んで、葉鐵の錆の臭のする、此の生暖かい水の樣なこんな旨い酒は全くこれまで飲んだ事はなかつた。老人は洋盃の中にパンを切つて入れて塩を振りかけ、然る後東の方を向いて祈禱を初めた。「さあ旦那、俺達の御馳走も上つて下せえ。」此の御馳走はなか〳〵美味しかつた。で、レブインは晝飯を食べに家へ歸らうとして居たのを止めた位である。

七月七日　基督の命令

まア、お前自分の靈のことを考へて見ろ。物事をこんな風にしておいてよいものか？お前が俺に一言云ふ——俺がお前に二言云ひ返へす。お前が俺を一つ平手でピシャりとやる——俺が二つ擲り返へす。左樣ぢやあるまい。基督は地上を方々お歩きなす

つたが、そんな馬鹿げた眞似をしろとは、吾々にお敎へにならなかつた。若し一言お前に云ふものがあつたら、お前はじつと默つて居ろ、云つたもの自身の良心が咎めて呉れる。そんな風にしろと基督は吾等にお敎へなされたのぢや。誰かゞお前を擲つたら、お前は一方の頰を向けて、「こゝをお打ちなさい、若し私が打たれる樣なことをしたなら。」といふんぢや。左樣すりや、向ふの良心が自分を突刺ノ、。對手は謙遜になつて、お前が云ふ可きことも聽く樣になる。そんな調子にしろと基督は吾等に命令なされたのぢや。だから決して依拈地にはなるな。何故お前は何とも云はないんぢや？俺が云つてることを眞正とは思はぬか？」

七月八日　小供の純愛

だが單に母ばかりと限らず、父を始め馭者に至るまで、幼年時代の私をとり卷いてゐる人々はみな、何となく殊更善い人のやうに思はれる。多分これは淸いそして愛のある私の小供心が恰度鮮やかな光線のやうに、人々のうちにたゞ良い性質を（それは

誰にもある）ばかり求めかつ照した爲めであるに相違ない。

また、これ等の人々が凡てとりわけ善い人々に思はれたといふことは、彼等の中に缺點ばかりを認めることよりも遙かに眞實に近いものである。

七月九日　他人の批評

その外、彼等（母と兄）にはもう一つ共通な點があつた。思ふにそれは人々の批判に對して平然たることであつた。彼等は決して他人の惡るい事を言つた事がない、これも私が自分の兄を引合に出して保證する所である。私は兄と共に半生を送つたから能く知つて居る、胸では餘程人の事を飽足らなく思つても、口に出すときには機嫌よく嬉しさうな笑を伴はせた。私の兄はいつも斯ういふ風であつたが、これと同じものが母の手紙の中に見出されるのである、それと同じものが彼等二人を知つてゐる者の口から聞かれるのである。

七月十日　誠實

もう一つ私の母には人と違つた點がある。それは彼女の手紙の打解けてゐる事と單純なことである。此時代には自分の感情を誇張して表はすのが流行になつて居た。で「たぐひなき」とか「神様と崇めたい」とか「わが一生の喜び」とか云ふやうな言葉は親戚間には盛んに使用せられた形容であつた、そして、かうした讃辭が華やかであればあるだけ、誠實は少ないものであつた。

七月十一日　純潔と死

彼女は悔恨なしに人生を去つた。彼女は死を恐れないで、それを祝福として受けた。

是は屢々言はれる事であるが、それが本當である事はいかにも稀である！ナターリヤ、サ・キシュナは信仰の中に、福音の律法を果たしつゝしつかりと死んだので、死を恐

れる事ができなかつた。彼女の全生涯は純な、非利己的な愛と自己犧牲とであつた。若し彼女の信條がもつと高かつたら、彼女の生活がもつと高い目的に捧げられたのだつたらどうか、さういふ譯でこの清い魂が愛と讃美とを受ける資格が少しでも減ずるであらうか。

彼女はこの世に於いて一番善い、一番立派な行ひを果たした。彼女は悔恨も恐怖も無しに死んだ。

七月十二日　猫の惡計

一羽の鷲が木の上に巣を作つた。そして數羽の雛をかへした、それから野豚もその木の下へ彼女の藁床を運んで來た。

鷲はいつも餌をさがしに飛出しては、持ち歸つて雛に與へた。豚は木の周圍を鼻で掘つたり、森へ獵りに出かけ、夜になると子のために食物を持つて歸つた。

そして鷲と豚とは隣同士の親しさをもつて住んでゐた。

一匹の年とつた牝猫が雛鷲と子豚とを殺してやらうと工夫をこらした。

「鷲よ、お前は餘り遠くへ飛んで行かない方がいゝよ。野豚に注意しないといけないよ。豚は惡いたくらみをしてゐるよ。豚は木の根を掘らうとしてゐる。お前はいつも豚が鼻でつゝいて居るのを見るだらう。」

それから牝猫は豚のところへ行つて言つた。

「豚よ、お前は惡いものを隣合せにしてゐる。昨夜私は、鷲が雛に言つて居るのをきいた。「可愛い兒たちよ、今に美味しい子豚を御馳走してあげますよ、豚がよそへ行つたらすぐに、小さい若い豚を持つて來て上げますよ。」その時から鷲は餌を探しに出るのを止めた。又豚も二度と森へ行かなくなつた、鷲と子豚は飢へて死んだ。そして牝猫はそれを喰つてしまつた。

七月十三日　床下の鼠

一匹の鼠が倉の中に住んで居た。床に小さい穴が開いてゐて、米粒がそこから溢れ落ちて來た。鼠の生活は幸福であつた。がその生活振りを他の者に見せてやり度い望が起つて來た。彼女は床を嚙んで大きな穴を開けて他の鼠を招いて來た。「おいで」と彼女は言つた。

「御馳走するよ。お前達の食べる丈け食べものは充分にあるよ。」

しかし彼女が他の鼠を招いて來てからは、そこにすこしも穴の開いてないのを發見した。それは百姓が床に大きな穴が開いてゐるのに氣がついてふさいでしまつたからであつた。

七月十四日　道を求めて

「其年の間、自分は孤獨な自己の中に退いて、道德的生活を送つた。人間の運命とか

半來の生活とか、又は心靈の不死とかに關した有らゆる抽象的な疑問は、既に自分の前に横つて居た。そして自分の幼い弱い悟性は無經驗の熱心を以つて、人間の理解力が到達し能ふ認識の最高度を豫想する様な、此の難問題を解決しやうと力めた。

ある春の朝、召使の者が窓の戸を上げるのを手傳つて居ると、急に自分は、基督教徒の犧牲の歡喜と滿足とを感じた。「かうして自分を苦しめて、ニコラス（召仕ひの名）の爲めに働いてやりたい様な氣がして來た。「自分は是までまつたく馬鹿であつた。何の位善良で幸福である得たか知れないものを——是からは屹度善良で幸福になるのだ！」と獨言した。「自分は直に、此瞬間から別人になつて、新らしい生涯を送ることにしやう」

七月十五日　本質と表象

「心の中では此やうに美しく明白ではあるものが、何故紙の上に落す時には、斯かる見苦しいものとなつて表はれる事だらう。一般に人生の上でも理論を實際に移さうと

する時には、矢張りそれを見る」

七月十六日　自然と人間

「人間は自然が生きる如くに生きる。彼等は死に、生れ、配偶し、再び生み、戰ひ、飲み、食ひ、樂しみ、而して又死ぬのである。而して自然が、太陽や、草や、動物や樹木の上に課した不變の條件の外には、特に人間に限られた條件の外には、特に人間に限られた、條件と云ふやうなものはない。彼等は他に法則を持たぬ。從つて彼等の幸福は自然と一つに成ると云ふことに有る。」

七月十七日　狼と弓

獵師が弓と矢を持つて獵に出かけた。彼は山羊を殺して肩にかけ家に歸らうとした。その途中彼は野猪に出逢つた。獵師は山羊をおろして野猪を打つて傷を負はせ

た。野猪は獵師にとびかゝり、牙をたてゝ獵師を衝き殺した。それから自分も息が絶えて了つた。

狼が血の匂を嗅いで山羊と野猪と獵師と弓とが横つて居る場所まで來た。狼は大變喜んで獨言を言つた。「さあ、私はながい間食物に不自由はしないぞ。が、一度にみな食ひつくすやうなことはすまい。一つも無駄にはならないように一度にすこしづゝたべよう。先づ堅い部分から喰べて、それからうまいところを御馳走にならう。」

狼は山羊と野猪と人間とを嗅いで言つた。

「この餌は柔かいから後にたべやう。何よりもさきに此の弓の弦を食つてやらう。」

狼は弓弦をかみ初めた。ところが喰ひきつてしまつた時に弓が彈けて狼の腹を打つた。そこで狼も死んで了つた。やがて外の狼が來て、獵師と山羊と野猪と、狼をたべてしまつた。

七月十八日　實例

……今や私は模範を示すにはたゞ生活や生活の實例によるより外はないといふ信念を有するに至つた。此實例の効果は甚だ遲緩で、甚だ不定的である。（それは其實例が誰に對して効果を及ぼすかを知ることが出來ないと云ふ意味に於てゞあると思ふ）だから甚だ困難である。

然し衝動を與へ得るのは實例ばかりである。實例――基督教的即ちあらゆる條件の下に於いて理性的にして幸福なる生活を送り得ることの實例――だけが、私にも貴君方にも必要である、どうかお互に之を行ふことを助け合ひ度いものだ……。

七月十九日　神醉

「驚くべき曙光が、沐浴と野生の果とが、余を余の愛する心神恍惚の狀態に導く。二ケ月の間、余は筆を執つた事もなければ又物を考へた事もないが、今年の樣に神の世

界を歡喜したこともない。余は茫然として口を開きながら、何物かを失ひはしないかといふ懸念の爲めに身動きする事も恐れて立ち盡すのだ」

七月廿日　汎勞働

「私のもう二つの問ひに答へてくれ、」王は云つた。「第一には、何故土はその時にはこのやうな穀物を生えさせたが、今はそうでなくなつたか？第二には、なぜお前の孫は二本の撞木杖をついて、おまへの子は一本ついて歩いて居るか、そしておまへ自身は一本ももたずに歩いてゐるのか？お前の眼は輝いて居る。おまへの齒は堅い、そしておまへの言葉は明瞭で耳に心地がいゝ。どうしてこれらのことはさうなつたのか？」

老人は答へた。

「これらのことがさうなつたのは、人が自分の勞働によつて生活することをやめて、他人の勞働をあてにする習はしになつたからであります。昔は、人々は神樣の律法に

したがつて生きてゐました。彼等は彼等自身のものだけを持つて居ました。そして他人が作りだしたものを貪りませんでした。」

七月廿一日　疑惑の日

私は人民の行列の終つて居るところに立ち停つて居た。私に近い所に居た者共は、私が彼等を見詰めなければならぬほどに私を見詰めた。彼等の肉體を被うて居る裂け殘りの着物は色々の風をして居た。併し彼等凡ての者の眼の表情は一樣に「何故お前は、他界から來たお前は、吾々と一緒に止まつて居るんだ。お前は誰だ。お前は吾々の窮乏を見て喜び、氣晴しにお前の閑をつぶし、そして吾々を嘲弄し度いと思つて居る何不足ない富豪か、卿も亦、存在することの出來ない吾々を憐れむ人か」と云つて居る樣に見えた。

七月廿二日　無政府と制度

無政府とは制度の缺除の意ではない。たゞ人々が暴力によつて服從することを餘儀なくされて居る制度の缺除であつて、人々が自意志的に正當に服從するところの制度である。でなければ自分には理性を賦與された者の社會は組織され得ず、又、存在する事の無い筈であるやうに考へられる。

七月廿三日　金錢と奴隷

今や吾々は、名目の上では奴隷の所有を拒みながら、而も金錢のために（そして政府の强制徵集のために）金錢に對する吾々の權利を要求するに至つた。即ち他人の勞力に對する權利を……。

七月廿四日　眞の財産

吾々の妻や子や奴隷や馬を、吾々の財産として要求することは、實際と矛盾した純然たる虛構である。そしてそれを信ずるものをして惱ましむるに過ぎない。何となれば私の妻や子は、私の身體が私に從ふ樣には決して私に從はないからである。それ故に私自身の身體だけが常に私の眞の財産と稱び得る唯一のものである。――それ故にまた、金錢や財産は、決して眞の財産ではない。併しそれはたゞ、自欺と苦惱の根源である。常に私に服從し、私の意識に結びつけられる私の財産と云ふものは、たゞ私の身體ばかりである。

七月廿五日　惡の根源

財産は一切の惡の根源である。同時に近代社會の一切の活動が向けられて居り、世界の一切の活動を指導するところのものである。でも國家や政府は財産のために、萊

因の河岸や、阿弗利加及び支那の土地や、バルカン半島やを占領せんとして、陰謀を企て戰爭を始める。銀行家や、商人や、製造業者や、地主やは財産のために鬪爭し、欺瞞し、壓制し、苦しめる。裁判所や警察は財産を保護する。懲役監獄は――所謂刑罰と云はれる一切の恐怖――そは凡て財産のために作られる。

七月廿六日　不思議な事

人々が何もしないで、煙草を喫つたり、遊んだり、彼方此方と馬を乘りまはしたりする時に、人民の一大隊もが、彼等を食はせたり温めたりするために多忙を極めて居ると云ふことは不思議ではないか。

七月廿七日　女子の權利とは

謂ふところの女子の權利と云ふ問題は、眞の勞働の法則から離れた人々の間に起つたものである。又その人々の間にのみ起り得たものである。その法則に歸りさへすれ

ば、それで此の問題は消滅する筈である。自己に特有の止み難い勞働を（子を產み育てること）もつて居る女は、男の勞働を分つことの權利を要求することは決してあるまい。

七月廿八日　二人の百姓

或る時二人の百姓が、互に擦れ違はうとしたら裾がからみ合つたので一人は叫んだ。

「私に道をお讓り下さい。私は大急ぎで町へ行かねばなりません。」

も一人も言つた。

「あなたこそ私を先に行かせて下さい。私も大急ぎで家へ歸らねばなりません。」

それで長い間二人は言ひ爭つた。

七月廿九日　女の奉仕

あなた方は直ぐ又これらの苦難の後、休みもなく、中絶もなく、勞働と苦難との他の一つゞきであるところの保育のそれらに取りかゝる時それを知る。そしてこれが爲めにあなた方は、自分の感情を鎮め、強い人間の必要――即ち諺には父よりも母よりも快よいと云はれてゐる睡眠の要求、をも排けるのである。いく月の間、いく年の間二夜も續いて眠らないこともあり、終夜目覺めて居ることも稀れではない。唯獨りあちらこちらと歩きながら、その疲れた腕には病める嬰兒を搖りながら。嬰兒の苦しみはあなたの心を裂くのである。誰にも認められず、見られずに、それに對して何等の褒詞も報酬も豫期することなく、あなたがそれを凡て爲すときに、又偉大なる行爲として――はなく、かの福音比喩に於ける勞働者の如く、唯自分の義務を行つてゐるのだと考へながらこれを爲して居るときに、――そのときにあなたは、何が僞りの道化たる勞働であり――人間の名聲に對して、そして何が眞の勞働――即ち神の意志の實行

――であるかを知り、自分の心の中に此の神の意志の指示を感ずるのである。若しもあなたが眞の母親であるならば、當然のものとのみ考へて何人もあなたの勞働を認めもせずに稱へもしてゐないのみでなく、あなたが働いてやつた人々ですら、あなたの恩に背くのみでなく、あなたを苦しめもし批難することが少なくないことを知つてゐる筈である。その次の子供にも亦、あなたは同一のことをする――再びあなたは、苦しみ再びあなたは、認められない恐る可き辛苦を繰返し、再びあなたは、何人からも何等の報酬を求めないで、そして前と同じ滿足を感じてゐる。

七月卅日　子を産まない女

人工的に子供を生まない樣にしてゐて、その容姿などで男を惑はす婦人に就いて云ふならば、彼女は男に勝つてゐる女であるのでなく、却つて男に汚され、男の水準に引きさげられた女である、かくて彼の女は男と同じく彼女の義務から離れ生活　合理的な意義を失つてゐる女である。

七月卅一日　賢婦

こうした母親のみ、その夫の財力とかその子の免許狀とかによつて、子供たちの外的な安全を求むることをしない。併し彼女自らの知つて居る神の意志である自己犠牲の履行や、生命の危險を伴ふ勞働に耐ふるの才能を彼等に課する。その中にのみ生活の安全と幸福とが横はつてゐるのを彼女は知つてゐるからである。かゝる母親は自分の義務の何であるかを他人に尋ねる必要はない。彼女は前からこれを悉く知つて居る。そして何も恐れはしない。

八月一日　二頭の馬

二頭の馬が二つの荷を運んで居た。前の馬は精出して行つたが、後の馬は怠けて居た。馬方は後の馬の荷物を前の馬に積みかへ初めた。それが全部移された時、後の馬は樂々となつて前の馬に言つた。

「勞苦と汗と、お前が精出せば出すほど、苦しまねばならぬ。」

彼等が居酒屋に着いた時、持主は言つた。

「荷は一頭の馬が運んだのに、二頭の馬に秣をやる必要がない。私は一頭の馬に飽くだけの飼料をやつて、も一頭の馬の咽喉は切つてしまつた方がいゝ。さうすれば少くとも毛皮だけでもとれる。」

そして彼はその通りにした。

八月二日　嘲笑を忍ぶ德

グリーシヤは一つの創作的人物である。これ等の半狂信者の聖徒の多くが私達の家にやつて來た。そして私は非常に深い尊敬をもつて彼等を見ることを教えられた。その事に就いては實に、私を育てゝ呉れた人々に深く感謝しなければならぬ。よし彼等の間には不眞實なものがあり、或は懦弱と不眞實の時代を過して來たものがあつたとしても、それでも尙、彼等の生活の目的は、私が幼少の頃に彼等の努力の高さを實際には矛盾して居ても無意識的に了解することを學んだのを喜びとする位の高いものであつた。彼等はマアカス・オーレリアスの所謂、「善き生活に向つての嘲笑を忍ぶよりも高い德がない」と云ふ言葉を履行したものである。常に善き事業を汚すところの人間の光榮に向つての慾望は、賞讃をさけるのみならず（嘲笑すら惹き起すが如き努力に同情せざるを得ざらしむる程、）有害にして不可避的なものである。

八月三日　犬と料理人と

料理人が晝飯の仕度をして居た。二三匹の犬が台所の戸口に寢て居た。料理人は小牛を殺して、中の臟腑を空地に投げた。

犬がそれを攫みあげて喰つてしまつた。そして云つた。

「料理人はいゝ人だね。あの人は上手に料理するよ」暫くの後、料理番は蕪や葱を洗ひはじめた。そして外側の不要なところを投げ捨てた。犬は走り寄つて鼻で嗅いで云つた。

「料理人は鈍馬になつたね。あの人はうまいものを作つてゐたが今はくだらないものばかりつくる」

しかし料理人は犬の云ふことはきかないで、いつもの通りに晝飯を料理した。家の人々は晝飯を食つて、たとひ犬はほめなくてもそれをほめた。

八月四日　斧と鋸と

二人の百姓が木を伐りに森へ入つた。一人は斧を持ち、も一人は鋸を持つて居た。彼等は一本の木を選んだ後爭ひ初めた。

一人はその木を伐りたほす方がいゝと言つた。も一人は挽く方が当然だと言つた。

第三の百姓が言つた。

「私がかたをつけて上げよう。斧が鋭かつたらそれで伐るがいゝ、鋸の方がもつと鋭かつたらそれで挽くがいゝ。」

彼は斧をとつて伐りはじめた。しかし斧はなまくらで伐る事が出來なかつた。

彼は鋸を取りあげた。が、鋸は刄が磨り減つてすこしも切れない。そこで彼は言つた。

「喧嘩するのは氣が早すぎる、斧は伐れないし鋸は挽けない。お前の斧は磨き、お前の鋸はやすりをかけなさい。それから好きなだけ喧嘩するがいゝ。」

けれど二人の百姓は、一人はなまくら斧を持つて居るために、も一人は歯並の悪い鋸を持つて居るために、前よりも一層怒つて撲り合ひを初めた。

八月五日　調和せる自然

美くして強い自然は和解を呼吸した。

人々が此の無窮な星多き天の下に、此の美しい世界に住むべきところを持たないと云ふことが有り得るだらうか。憎悪や復讐や同胞を殺さうとする煩悩などか此の恍惚たる自然の間にあつても人の靈魂を捕へて居ることが出來るであらうか。人間の心の中にある凡ての悪は自然と――此の美と善との直接的なる表現――の接觸に於いて、消滅すると、人は考へるだらう。

八月六日　召使

召使ひをつかふことは生活を誤らしめる。墮落させる。召使を使用するや否や、汝は自身の要求を増加して生活を複雜にし、又それを重荷たらしめる。自身で事をなす時の喜びの代りに、困惑に陥らしむる。そして第一に、人生の主要な義務、人間の同胞關係の実行を放棄せしめる。

八月七日　八月七日の日記より

日本人からの嬉しい手紙を封入して、クロスビイからの來信。チエルトコフより良い手紙。通信が大変怠られてゐたのだ。自分は全く孤獨で、身体が弱つてゐる。自分は屢々、人間は常に奉仕の生活を送らねばならぬと考へるが、然し実生活に入ると全く忘れてしまふのではないけれども、而も氣持を散漫にしてしまふ。

八月八日　基督の教理と暴力

さう以前ではないが、私はあるスラブ族最負の正統派信者とあるキリスト革命者との間に往復した興味ある通信を手にすることが出來た。一人は囚はれたる同胞奴隷を救濟する戰鬪の參與者として暴力を辯護した。他は吾々の兄弟、抑壓せられたる露國農民の名に於ける革命の徒黨として同じことをした。

兩者は暴力を希求した。そしてその何れも耶蘇の教理の上に自らを立てた。まことに耶蘇の教理は幾百の異りたる方法に於て了解されてゐる。しかし不幸にも決して耶蘇の言葉の不可避な意味と調和する單純にて直接的な方法に於いては解されない。

八月九日　社会救濟としての耶蘇の教

今や私は、耶蘇が「悪に敵する勿れ」と云つたのは、この法則を守るならばどんな結果が起ると云ふことを告げるばかりでなく、教理に適應する新社會の基礎を立て、

モーゼの律法や羅馬法や、その他今日の諸種の暴力的律法によつて建てられた社會的基礎に反對したのだと云ふことを了解した。彼は其結果として人間をその自縄自縛の惱みから救ひ出すべき新しい律法を編成した。彼の宣言はかうであつた。「爾曹は爾曹の律法が犯罪を救ふと信じて居る。しかし事實はこれに反して罪を一層多くさせて居る。惡をつぶすたゞ一つの方法がある。即ち一視同仁、惡に報ゆるに善をもつてすることである。幾千年の間爾曹は他の方法を試みた。今は余の方法を試みよ、その反對を試みよ」

八月十日　一歩前進

一八五一年四月一八日

予は己れを抑制しきれず淡紅色の衣服に包まれた一個の人影を手招いた。遠見に立派には見えた。そして後の扉を開けて彼女を招き入れた。予は彼女を正面に視る事が出來なかつた。彼女の爲に己れの規則を裏切つたと云ふことは實に厭ふべき忌々しい

氣狂ひじみた事であつた。先方が己に對して眞の感情を披瀝して居らぬに拘はらず、相手を善意に解釋せねばならぬ場合には、誰しも憎惡の念に驅られるであらうが、予も亦其れと同じ感情をつくづく感じた。予の心中には義務と慊惡が兩々相反して居た。

悔恨の情頗る痛切、これ程痛切に感じた例しは、これ迄唯の一度もなかつた。此れこそ人生に一歩を踏み出したものである。

八月十一日　二つの道

「だつてそんな事がどうして出來ます、罪もない人の命を取るなんて！誰が出來るもんですか？神様がお罰しなさらあ！」

「それぢやシパックの娘をお前の女房として見るのはお前がお前の耳を見ると同じことで、まづ難しいな。」とブリデイバルカは云つた。「聖人になりてえなら天國のことのほか、結婚も上衣も思つちやいけねえや。お前は修道院へ行つて、修道的の難業

苦業に入らなけりやいけねえ。然し此の世を面白く暮さうてんなら罪を犯すのなど心配して居ちや駄目だ。たゞ露見して西伯利亞へ送られねえやうに罪を犯さなくちやいけねえんだ」

「神様の罰は西伯利亞に送られるよか重い！」とトロキンは歎息して云つた。

「お前その神様つてのを見たのか？」とブリデイバルカは訊いた。

「見たことは無いけれど知つて居ます、」とトロキンは答へた。「それに牧師様が神様は萬のことを知つて居らつしやる、何事も隠すことは出來ない、萬事を凡てお罰しになると仰有つた」

八月十二日　惡に敵する勿れと十字架による宣布

耶蘇は簡單明瞭に云つた。社會の基礎となされて居たところの、暴力による惡への抵抗と云ふ法則は誤りであり、また人間の性質に反して居ると。そして彼は他の基礎を與へた。即ち、惡に對する無抵抗のそれである。彼の教理に從へば人を惡より救ふ

法則である。「爾曹は信する、暴力に訴へて、爾曹の法則の惡を正すと。決して……却つてそれを增大するばかりだ」幾千年の間、爾曹は惡をもつて惡を滅さうとした。而もそれを滅し得なかつた。ただそれを增したばかりだ、が爾曹に命ずることをなせ わが例にならへ。然らば爾曹はわが教理の眞なることを知るであらう」と。ただに言葉に於てのみならず、行爲に於て、死によつて、耶蘇はこの「惡に敵する勿れ」の教理を宣布した。

八月十三日　隠れたるより顯はるるはなし

「警官に發見できないと云ふのは確かだらう、」と彼は考へた。

「彼等は最早男達の死は災難の結果だ、盗難ではなかつたと決めて了つた。誰だつて疑雲を俺にかける者はない。俺達は凡ての人を欺き終せた。然し神様は欺けない。神様は有つた通りに、凡てを見て居られる。神様は萬事辨へて居られるのだ……俺の働いた事を辨へてゐられるのだ。何も隠す事は出來ない——何にも、何も。神様は

俺をお爾しになるのだ！」

八月十四日　祈の時

祈るといふ事、人々は祈禱は必要である。儀式、讃美歌、讀經、聖像等によつて呼び起される祈禱の快よい感情を持つことが必要だと云ふ。だが祈禱とは何であるか？神との親交、神に對する自己の關係の認識、心靈の最も高い狀態である。斯樣な心靈の狀態が單に外部の感覺に訴ふる行爲だけで得られるだらうか。祈りたい氣持には寧ろ例外のまれな瞬間に於てのみ、又基督が曰ひ、且エリヤが嵐の中ではなく柔な微風の中で神を見たと同じやうに、必ず孤獨の時に於てのみ有り得ると云ふが一層の本當の事ではなからうか？

八月十五日　愛の喜び

シモンが庭まで來た時、この旅人は後れずにシモンと並んであるいてゐた。風が起つてシャツの下に吹き込んだ。酒の力はもう消えて了つて寒さが骨に泌みた。彼は歩き乍ら嚏をはじめた。そして女房のジャケツを強く引きしめて而して考へた。「これがお前の上着の買ひ方だ、お前は上着を買ひに行つたのにカフタンまでもなくして家に歸るのだ！さうだ、其上にお前はこの裸男をつれて歸るのだ。マトリオナはきつとそれが氣に入るまい。」

マトリオナについて思ひ浮べると彼は俄にしよげはじめた、が、其眼をその旅人に落すや否や、彼はあの禮拝堂の後で、どんな眼つきでその男が彼を見たかをし思ひ出した。而して彼の心は喜びに躍つた。

八月十六日　貧者の知足

ところがある日の夕方晩く、王子が小つぽけな茅屋の傍をお通りになりました。すると其時偶然茅屋の中で誰かゞ「あゝうんと稼いで、腹一杯たべた、これであとはぐつすり眠るばかり。もうこれ以上の贅澤は言はない、あゝ有難い〳〵」と云つてゐるのが耳に入りました。之を聞いた王子は非常にお喜びになつて「あゝいゝことを聞いた漸く不平のない幸福な人が見つかつた。あの男のシャツを脱がしてお父様にお着せ申せば、御病氣は直におなほりになる。この男にシャツのかはりにお金をやればよからう。うん、さうだ。」

と早速お邸へ歸つて來て、直樣家臣の者に吩咐けて、先刻の幸福な人の處へシャツを貰ひにやりました。お使の者は飛ぶ樣に、其幸福な人の處へ行つてシャツを貰はうとしました。ところが此幸福な人はシャツ一枚無い程貧乏でした。

八月十七日　神を知る

そして自分の手の指を夫の頭の髮の中に突きさしながら云つた。

「サアあなたの妻に本當のことをお言ひなさいお前さんが恐ろしい事をしたんぢや無いんですか。」

「お前も亦俺を疑ふか。」とアクシオノフは言つて、兩手で顏を被ひながら、泣き出した。其時兵卒が來て、女房と子供達の立ち去る樣に言つた。アクシオノフは彼の家族に最後の別れを告げた。

家族の者が立ち去つた後、彼はどんな事が自分等の間に語られたかを思ひかへしてみた。そして、自分の女房も亦、自分を疑つてゐるのだと思つた時、彼は獨言した。

「眞實の事を知つてゐるのは神樣だけの樣だ。自分達が訴へなければならぬのは、唯神樣ばかりだ。たゞ神樣から自分はお慈悲を待たなければならない。」

そこでアクシオノフは、最早皇帝に慈悲の手紙を書かなかつた。一切の望をすてて